寛政
改正

みを流金

ヲ6
1558

6
巻

序

郭公は又ものまへ廊之度之
民所度居也ところ矢倉の
やうなるハ四角お講釋あれど
其巨慢ル義好乃腰掛とゑまきハ
あてやうたいことめてゑ思ふ人の
事ハ〳〵寄合てゑを居ハ
ちがべーやうれ大宇宙紙宜卯月
乃うしろあら底の意ハ〳〵ゑ
して羽をうちつけて任せ居る

郎と称し殆ど八百年を経て餘
以前の時代あんど宮〜うも
きこえぬべきの娘なりてはとまらぬ
ときいふ十年前浪花の遊廓の演劇
冊中の名言唯等物勒の一字と
こゞめりとぐまるぬ月日は歩つ
日〜くみたるの好きより新町
とは唱ふるもんにおつづ〜古さ
名所と成りもてゆよいよく
繁花の栄ひを孫び向ふ重

瀧の至命やまと機と瀧上し
揺をとゝもれ其情のほきるり
淀川のよどみなく流れて出く
浪花江の涙をうそうて傘し
こゞう思ふまうて戀するとと
其実形る心ハ風の前れ草の
あひまやもく時ゆく心ハ浪つ
上れ月の雫りかゞたゞれと面と
四づうひきれ杖つ精を手等うて
八しれぶるれる前る思れ草

此人ハ君が種をまきたまひしとなし
藤原の隆房ぬしのつぶやかれ
給へる宣哉と世の中を知らぬは
感じる古の人しあらば今を
あざむきて飛びしめかしこ
思ぬし行かなきは乃るまず里
は乃国にあり繁盛

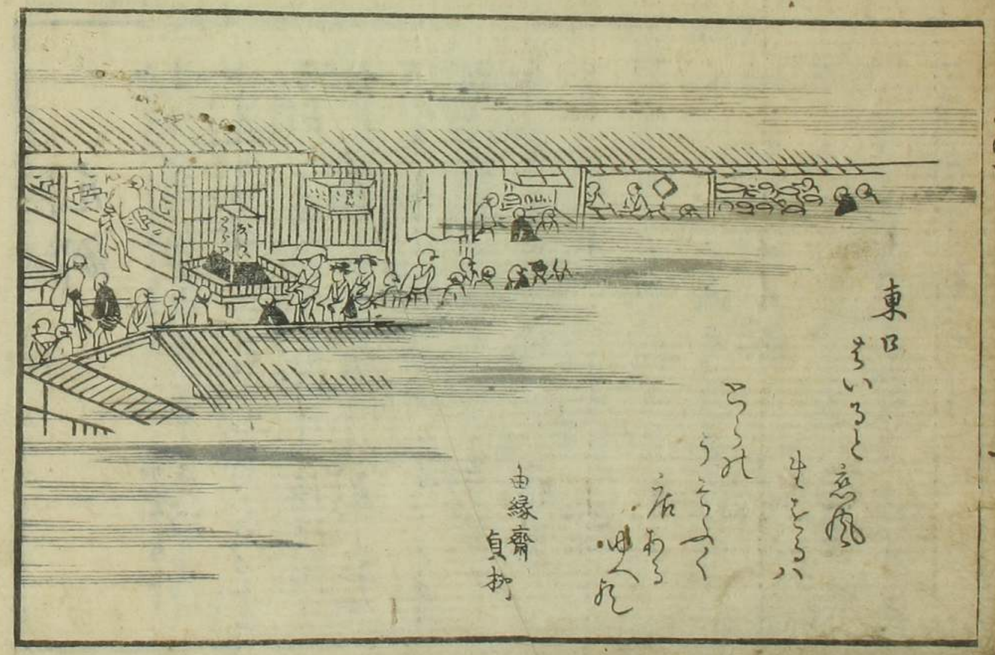
洒古市人識

寛政こゝのつ巳とせ
皐月

凡例

一 大坂新町傾城の事ハ元禄年中小寉三味線又ハ色里案内と云る書あらはし其後宝永年中に澪標と号し候へしも其後絶えし中古不二年類ハ思ひ立新板出して委撰今新町といへる名の高肩より考出し町々名の由来を記廓中名所古跡年中行事其外名物古実古例など考合詳にせる

一 和漢挿陌の通号縁号其のまゝよ御當家一月子輌といへる事ハ委記し畧たれバ文ハ略し別編に讓引用書目録ハ書のせざれば本文の連面にしるし


東口
由縁齋貞秋

一法花挿花抹茶とも百津
の揚屋ふ勝るるいちし法楽ぶさ
ゆく〳〵年月もゆ出たくしがくれも
さを國の法家者ふそしめんがあるこの
奥ふ百名一の弦器を弾ぶ
一昔ふ面所よ名ふ紅ふ来れ
とりぐもるんぢく法出へ名を殺し
ふるいたまの品とふる奥へ
名ふきのせ其因扇をくりく堂を
たくいらひ堂あぢまのあぢひるり
ふ紙故実古俗其ふ山宮ふ
ふる事い返てく考出し捕捕を
くふ面ふふの迹

大阪新町澪標
細見之圖

品目

一廓紀原
一新町開基并町小名因縁
一柝陌格式
一新町橋年暦
一東西大門盥觴
一土地方角考并門々開発
一花街名所古跡

元 無嘆吉例

越中橋最初

櫻屋敷春興

附 櫻井清冷

松屋敷枝折

觀音裏隨縁

道者横町扨子掛由来

高瀬庭住境

山家敷勝景

螢澤水嬉

一花柳年中行事

一揚屋無雙

一同 座敷亜圖

一茶屋負數

一里詞篇

一太夫品 附 一夜妻 辨 遊女解

附 越中 総角

夕霧 元 引舟初発

吾妻 松山

一傘仰

一長持運送 并調度通用
一仕着行粧 并二日着三日着
一身請門出
一天神位階 并小天神 庵天神
一鹿子位部類
附 月影汐相當
一幸頭女郎情 并藝子風俗
一籬節一曲
一局暖簾差別
一和氣称号

一禿由緒
一呼迎女古實
一勸進芝居太鼓不打由縁
一夜見世繁花
一限太鼓作法
増補之分
一君粧俚評
一途中之式
一座敷之客儀
一呼立之大法

一売之利發
一引舟之掛引
一藝子牽頭之客儀
一仲居取持
一遊客之幽趣
一粋之辨
一中古好衣裳
一夕霧の文 衣裳
一家々珍雅名物
一里詞篇

一價諸分
一遊女門出之故實
一紋日定目
一方角大畧図
一揚屋茶屋名寄
一商人名物名寄

己上

大坂新町
細見之圖　澪標

廓紀原

○廓の始

当津の柳陌い往昔天正慶長の比
より諸所より接女を抱渡世のこの
しを寛永年中より今はた地を下
おろし諸所の接女を一所にあつめ
一廓の門小軒をもうけ其所を新町
亦次良といはん浪人者小右廓の
庄屋年寄を投ず仰付永くけい
せい町とかへ今寛政十年まで
百七十年余ふるなり

○新町の風景

新小町と新小町とかくしまう世人

新町とうぶ新屋町又ハ中ゝ以ふ

新町のあつまり　香稲庵　竿秋

▲瓢箪町　但南組

通り筋なり其ゝ道頃ゝ小
出合ゝん町ゝとゝと其所の一町元和
の比はゝこゝろへ移ゝり又古老の曰
元来伏見浪人よ本村又次郎と
いつる浪人あり中ゝ人元本村氏
の水乳の人のゝゆゝく故あゝく豊
臣家滅馬市の瓢箪を信ゝ
不相を故小名ゝゆゝ元和

寛永の比本村をかゝゝり本村屋又
次郎と名ゝ廓七町の起なゝ砌ゝて
玄蕃よハ武具なゝ揃ゝ小二
代目又次郎ゝ天和年中小
役茶小遠ゝ在原年号の後
断絶をゝしまゝい新町通ゝを
又次郎町とゝびゝも其後ゝ改
瓢箪町とゝひゝハせをゝれ新町
揚ゝを誂ゝく通ゝゝ也

▲作渡湯町　但南組

天正文長の比ゝ上揚屋ふまゝ
作渡屋ゝ手三ゝ揚ゝゝ遊ゝあ後の地
ゝゝ小寛永の比今の地ゝ移ゝ一廓
の門ゝ手三ゝ揚屋発の縁ゝゝく
作渡屋町とゝぶ廿西の一町を信ゝて

紙屋町とゝふは畢い作波紙屋と並の
玉の家をとゝろく作波屋町の名紙屋
町とゝふ也

▲吉原町　但北組　行京町也

此天陵ゝふ吉原とゝ云ことゝろあり
そゝ行う移をて故名ばくとゝ云寛永
年中小人のあゝをゝるゝ又通組の
の北を行波屋とゝふ

▲新京橋町　但北組

▲新浜町　日新

さゝれゝ所ゝへゝの波屋あゝゝを
寛文長年中ゝ此とゝ絶ゝふゝる
るゝ

▲九軒町　但南組

此所揚屋ばかりゝ長ゝ山の縣ゝ
ゝこゝ揚屋九軒を取立ゝる町也
かくれどくゝふ也又揚屋町ゝゝふ
根生の揚屋九軒町より今ゝ軒あり
又新浜町より二軒作波屋町ゝこゝ
軒合十二軒ゝゝくゝ揚屋の跡ゝ出ゝ
揚屋ゝくゝ揚屋の跡ゝ出ゝ
此此町年寄ゝゝ
ゝゝ拾別ゝゝく法華ゝ人の文
配を交るゝ

▲作波屋町　但南組

住吉高藤拾乃住人ゝ作波屋
ゝゝ此廓宗教の

こゝに紀氏あまりの地を故あつて
領し一町一郭を表とするものつく
作波屋町と云其後たゝ湯うの人を
小黄波し南北作波屋といつる名目
小名而已小路まきり作山町年寄組
こもるし代し組年寄是庵
文研を作波屋忠蔵といふ人
主後宗喰屋浄甫松屋宗甫と
いつる二人（二ツ家御ゆづりまた松屋
ゆづりまた作波屋へ一所よゆづりかゆい又
一町一屋敷ゑ主ゑ二ツ小
ゑゑれし故今二郭役ゑ宗喰屋い
世代ゆゞき文ゑ年野屋世郎兵衛
といつる人賞浮しく二代ゆゞき
ゑ後拾主作波しく習り代屋しき世世
年ゑゑ享保九辰年大坂大火ゆて

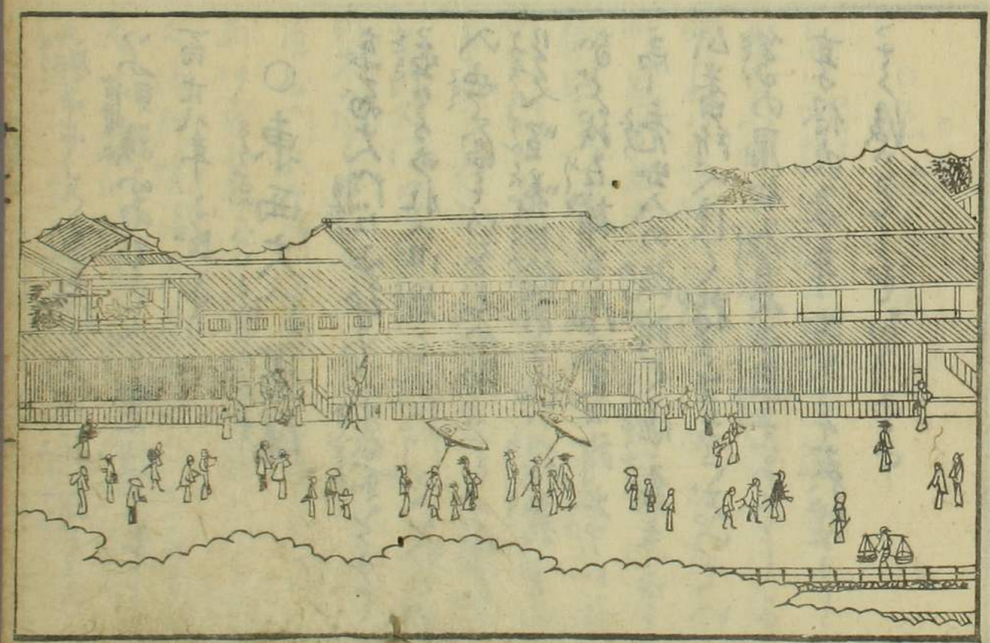
新焼しく宗ゑ又郭の門系屋西黄
のゑの傳家しく若ゑゑ作波焼後
八組屋家義なり大屋義屋あり組
郭宗ゑゑ屋敷ゑ七町ゑゑ作り

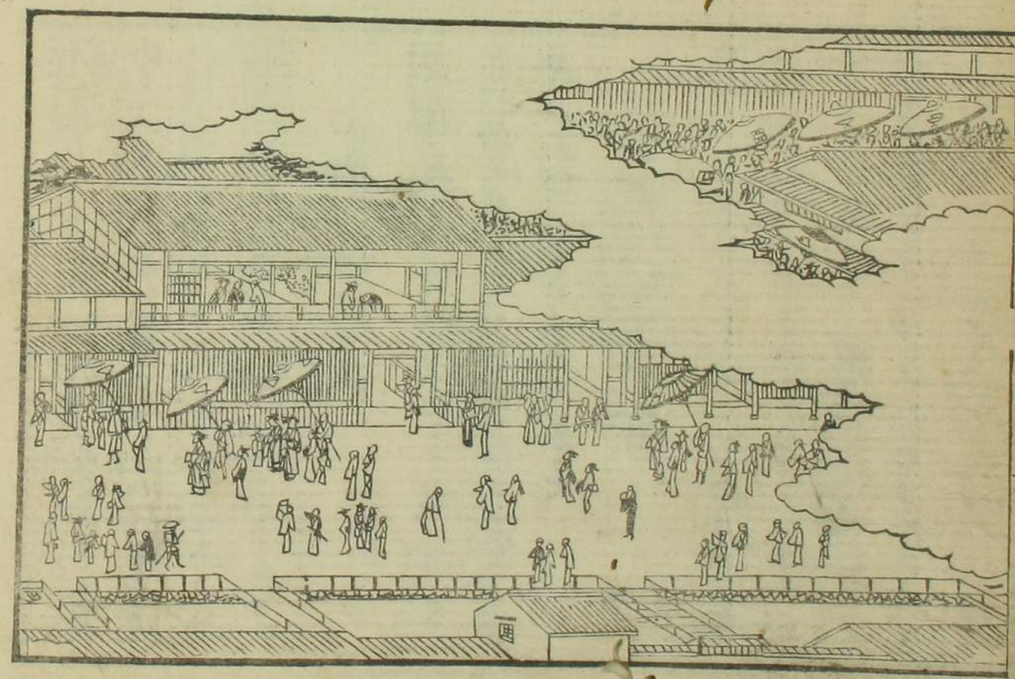
○柳陌格式

想游廓の門付ゑふゑ作古
木村屋又沢節屋松屋の格を以
今ゑ又町の年ゑの本和を

○新町橋年暦

西撫源順義文町名ゑ加宗橋あり
往古ハ廓一方ゑゆくゑし其時
ゑよハ山格ゑ東西の門常敬光
の後寛文十二子年ゑゑめくゑる
ゑ北廓無昌の為ゑ移ひしゆく





廓ゆやくるまるゑれば新町だらと
ゆ則後ゆあれもを人う寛政十年を
百九八年ゆ故あり

○東西大門盛鰯

東西大門口ゆ少もゝ〳〵ゆ和そゝて
ゑ〻ゝ西れハ出用ゝ門ゝをかゝめ
入西ゝ店ゝのをゝあ当ゝよゝゝ年ゆ
ゝゝ又堂晩ゆ倫あゝひハ狼藉ゝの
なゞ銭を捕るゝの番所岩ハ女
帝売出入の改所ゝ延享年中
代番所へたく様ゝさまゝざつてい
ゝの用ゆ具ゆ赦免ありしよ
享保九辰年出火ゝて新焼し
ゝ後ハ見ゝゝゞありゆき

○去地方久角考

東ハ西横堀助左衛つ町孫左衛つ町
義左つ町を限る西ハ立賣堀南裏
町南ハ長堀ゆ側年左つ町ゝ和ゝ
町留田屋町かぎり北ハ立賣堀南
側助左つ町中之町を限る東西
の大門口ゆ各ゝ番所あり〳〵ゆ西一
方ゆゝくあり〳〵ゆ明暦三酉年ゆ
東の大門口ゆ赦免ゝくゝあり東和
の大門と以其後寛文八申年ゆ
用ゆ門ゝゝ所ゆ赦免ゝゝゝゝハ
あけゞゆあり〳〵ゆ享保九辰年ゆ
大坂新焼後吉原町の門をゝゝき
又宝暦四戌年新町横町ゆ門を
ゝき門年作後ゝ町東の門を

ゑてきし也これ今ハ門みケ
原あり名苗原もと

○花街名所古跡

▲廿五曙之吉例

往古此新町廓祭の比より通をふ
新屋とゝふ女郎屋あり此あさしや
の末よ清玄花といふる人世渡る美
しく武年の若ふ雑煮の餅さく
調へうゝく廿五紙餅のうゝふ月
元朝の祝儀おさゝんりう其ゝ
次第小盤昌しく後よハ大分限
なゝゝ其倒ふまゝ毎年雑煮ふ
かぶゝを入き祝儀しゝるあり世人
廿五曙とゝふ吳名りう今ハ此家絶
くゝる

▲城中橋宮叡初

寛文年中新町茶屋多あ
ありし木村屋又清抱の城中とゝふる
金盛の女郎毎月揚屋入乃中の郎
限よい見ゝ和の花若男女半紙くん
ぎ四天ふ元清し往来ふ
ぐく則又ゝ郎屋の表りの彩
町へ乃ゝを表ときハ此
橋りう揚屋入りをし故ゝを号
く世人城中橋とゝ也今ハ

玄法百首　西徳寺

あゝれ我寿よ仏を
ゝゝいつまのゝけしの
ゝゝまのゝけゝん

▲櫻家表素奥　橋井清涼

元禄年中まで通り筋小橋屋表
松屋表ととくるまで橋屋しきりとて小橋
甚嘆と美名しるあて屋清兵
家表迄小大本の橋あまたあり
九軒町あげ屋井筒屋大長清つ
兵と雲泥し拾信へ今毎年毎
小橋吹抜井筒屋の橋やきて見
大ほくん然四月八日新焼して今ハ
卯月四月八日新焼して今ハ
山屋よ橋井戸ゝて動く清水
ゝと家屋表ハ通筋まあり

家集　源三位頼政

ほとゝぎす花のあとゝのひまなきい
ゝやあのくる夢のたゝ雲

▲松屋表枝折

又松屋表といふるまこれも通り筋
橋やしきのむかひ南側小吉屋屋と
いふ女良屋ゝ其裏小大本の松ま
これも見付小成ぐの樹あり
南北の名和ゝこれも正法元年
の出火まで焼しく松さかゝも今い
むし

玉葉集　後鳥羽院

松蔭のうつまに宿の池ちかき
みつのみくるもよ代いまむへき

▲觀音裏隨縁

万治寛文の比通筋西大門口南側

門跡の屋敷小茅師堂大宝といつる
三宝院流の山伏あり二百四西の堂と
建寄まを布こう延宝の比彼茅師堂
を白髪町くうんせんの地へ移を彼
くうんせんも大宝布施のよし不分明
石門口南側の家敷を今布の人
しゆんぐくりんを裏こと云

▲道者横町扇子掛茶由

乃先横町といふ孤蓬庵町東の門より
一丁目の南へ入横町こ裏石垣
く此横町和泉の見せ付さん
だらもる故こを名を又扇子掛と
いつる東の門へ入まる北へゆき新
京稽町のひぐし横町を云子掛い
和泉女郎の見せ付のもひ名

の名小今小まつくも板の橋を見
くまさ紀の名くすき板小似くうて
俗よ扇子掛と矣名とり

▲高瀬庭住境

吉京町の東小ふる瀬屋を云る茶屋
の庭泉名編山ろく絶系
ものくうう流宮此所よ茶ゝざる
といふ事なし名和の庭ふてあり
しよ享保年中小絶く今小

▲山家茶賜景

吉京町の西の渭よ茨木屋孝所
といつる女郎屋の長あり其
くるこ庭泉水築山樹木元石垣の
数寄屋かうひ屋茶い申小おくこと

[illegible]し[illegible]花やうの事
[illegible]小享保二戌年ハ[illegible]中あり
今いるし

延文百首　　為尼妙

世のうさ小かへくいるを[illegible]
いるを山のあしの[illegible]

▲蛍沢水嬉

八九十年ゝ[illegible]ゝ伝後宮町表
[illegible]の際へ家しくの庭掃を掃て
掃ゝ[illegible]ゝ小石の[illegible]作ゝく[illegible]
ゝゝ散乱ゝく[illegible]
おゝ[illegible]ゝ[illegible]廊中の人ゝ[illegible]
其ハよ出貞和ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]おびゝく[illegible]ゝ[illegible]

[illegible]や見[illegible]ん[illegible]
[illegible]作[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]
[illegible]夜の一[illegible]
[illegible]の色の[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]小今[illegible]
[illegible]ゝ[illegible]
の基[illegible]

●花押年中行事

正月　山里の猿ひ[illegible]
[illegible]ゝ大[illegible]小門[illegible]
[illegible]ゝ用地故通ゝ町
[illegible]ゝ故一[illegible]
[illegible]ゝ横町[illegible]
[illegible]町[illegible]
[illegible]故[illegible]

二月 初午二ノ午廿二日彼岸中
此里の稲荷にて祭りきる也

三月 毎年春三月桜さくの比
より若葉まで和蘭をと通る道筋
ふくよかなるを売るのみ桜をさして見
山吹或ハ牡丹芍薬百合紫陽花
夜菊の時花まで売見てる事ハ誠
ちかく一興也

花咲て死とむないハ病かな

十万堂 来山

四月 八日花摘なぎりきる也

五月 門松に繝ひく通る節句のおり
を立て男子ある家にハ居宅の前に
立る也これも断幅せずに此用地乃

さほさげる所まざる縁日にて摂町を
こえ先穢町ハ西へはれかくいおれを
殺日まく法言入ばどふる賑し

六月 当月中ハ流系の内抜ふて
これより此里の群集中ふも名所の
まつりハ仁徳天皇まつりの廿一日あの辺
ぞくろ町ふく祢の外の縄ふひ諸
人従撲す見物し廓中北大殺目
あり年ふよ稀ある事と知べし
おびたゝし

七月 七夕あかまとくる事も賑し

けいせいの大哲はまや　妙　弥生

あまのかは

例年十六日より廿ワ日まで

聖堂云のまち和市ゑ東西の門内
通筋の両側町ふ店をとう三人
出所のくものの分後他あるも賞人
来り観をるとすると帰りナほる
ゝり嗚ゝまぐ大政日切門内たま
踊とゝろゝあり新町太ゝの踊て
むゝゝう仕来り踊のゝゝも他所のと
踊ゝるゝぐ別源町ゝ来くゝれも
例年ゝゝゝふ定ゝ行ゝゝゝ年ゝの
ゝゝゝく傾ゝ来く或い町ゝ大百
ゝく町踊の年もあり又先年
伝波宮町ゝく踊場とかま人本戸
を張り宮一人ゝ踊ゝ一人ゝ揚を
ゝ料ゝく踊入用をまるひゝゝ
年もゝゝけゝゝゝれ家ゝれ取扱ゝ
ゝゝかゝゝ少人中絃ゝゝゝそのち

通筋ゝく寛保二壬戌年廓の内ゝ
ゝゝゝ場をかま人女郎屋ゝゝ踊るの
世話ゝゝ踊場新町ゝ揚屋系屋
ゝゝゝゝ見ゝゝあげ屋系屋ゝ
ゝでゝ見ゝゝゝど七月十四日ゝゝ八朔
ゝゝゝゝゝゝゝ方ゝゝく盤百
又大ゝゝゝゝ年ゝゝ八朔まで法ゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

又兵衛 [illegible]
燈籠を仕あし 紙和立ふと
さ伽くゝ紙をし仕ゝれぶを山内
風雅ゝのあり く燈ゝ
かゝ伽仕出ゝ ゝのゝ合ゝ
やゝゝゝ

八月 名月小女郎ゝ
ゝて板折ゝ ゝ花英と
ゝし 魂ゝ所車八紙やゝ
ゝどさ雨ゝのおゝひきゝ
ふゝゝき稚ゝの造ゝ和ゝ
ゝのい蒸菓ゝ又い酒さゝゝあゝひい
茶ゝゝゝ仕ゝゝゝ ゝゝゝ裏
あゝゝゝゝ ゝゝゝ

九月 後の月見八月の後或は
月じ又依所の ゝゝ高月中い

大敬日也六月の後と月日のゝふて
くゝりくい奥の敬日定ゝ

推句 方磨

秋の暑罰いゝ
ゝものゝゝい

十月 熱のゝの後ひ揚色い
敬ふふぎゝきゝ
ゝれ勿論ゝ

十一月 [illegible]
家ゝの燥掃ゝれ敬見

燥掃ゝ藤ゝ家い
ゝ房めゝゝゝゝ

室普齊 其角

十二月 年ゝめ家ゝの餅ゝ

[illegible]
中の大祇園社の廊[illegible]
[illegible]
[illegible]

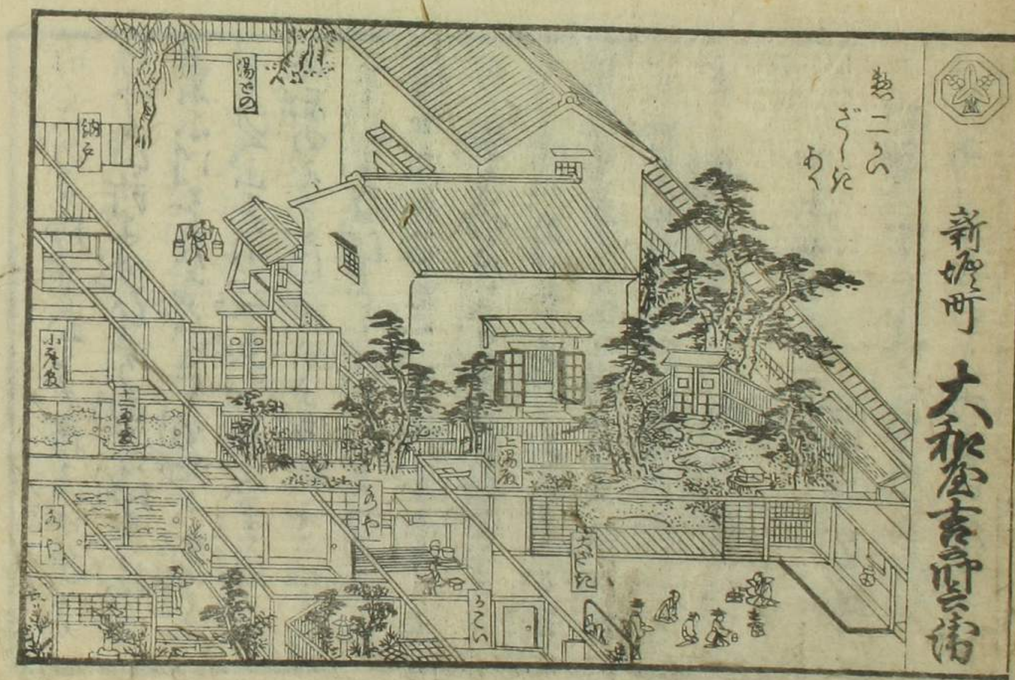
○揚屋無雙

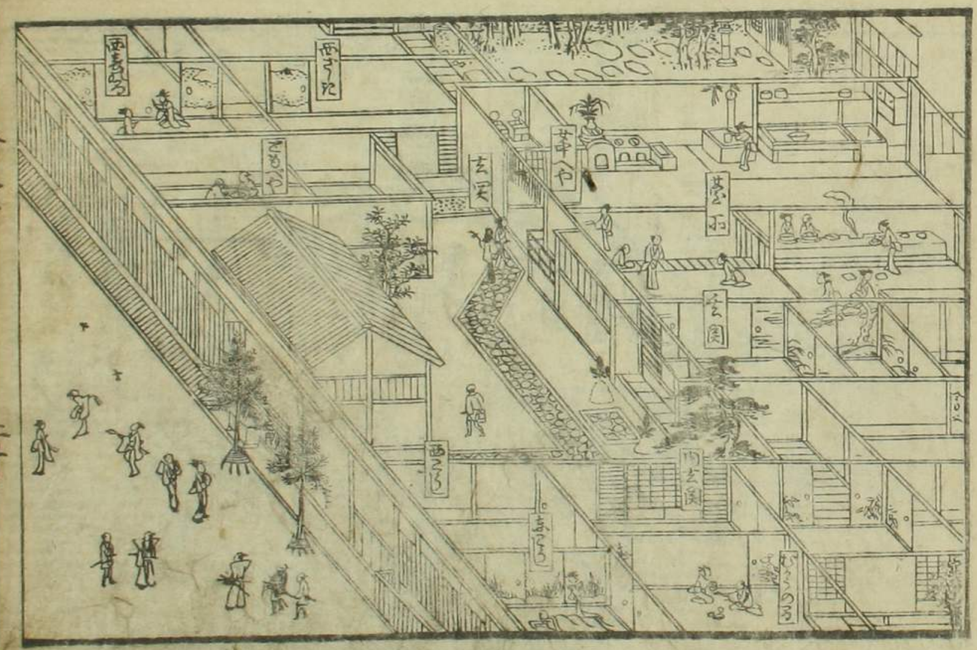
諸国ふくろとといつるものゝ[illegible]
[illegible]廊[illegible]
[illegible]揚屋小勝[illegible]
[illegible]の大[illegible]
小京落京の女郎小[illegible]京の
張をそなへ長崎丸山の衣裳を
[illegible]大坂新町の揚屋[illegible]
[illegible]門[illegible]
[illegible]
[illegible]唐[illegible]

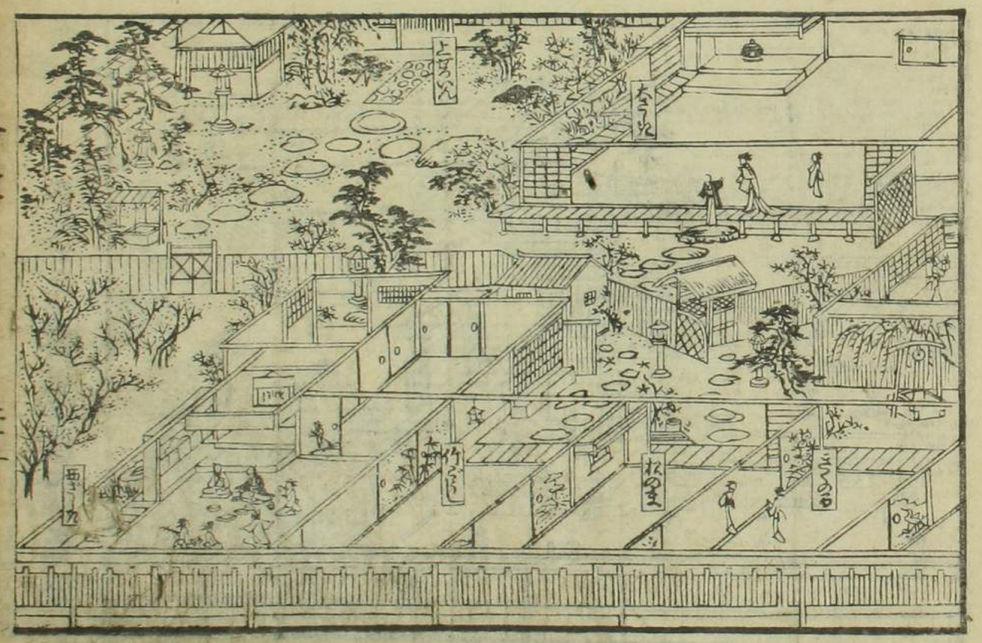
かくいあるゆゑとおもふ[illegible]る水樓と
いつもひ所よりひろう西よ海を[illegible]
東ふ川をたゞびきもゆ[illegible]
そびへ山あの[illegible]
の面のゝ[illegible]中〳〵言語ふのべ[illegible]
[illegible]れども若のつぎふ
揚屋座敷を百分一の張[illegible]
[illegible]余の揚屋い車[illegible]
[illegible]余のあけやものこゝをまと始
いづれも[illegible]
[illegible]の揚屋[illegible]
[illegible]
[illegible]

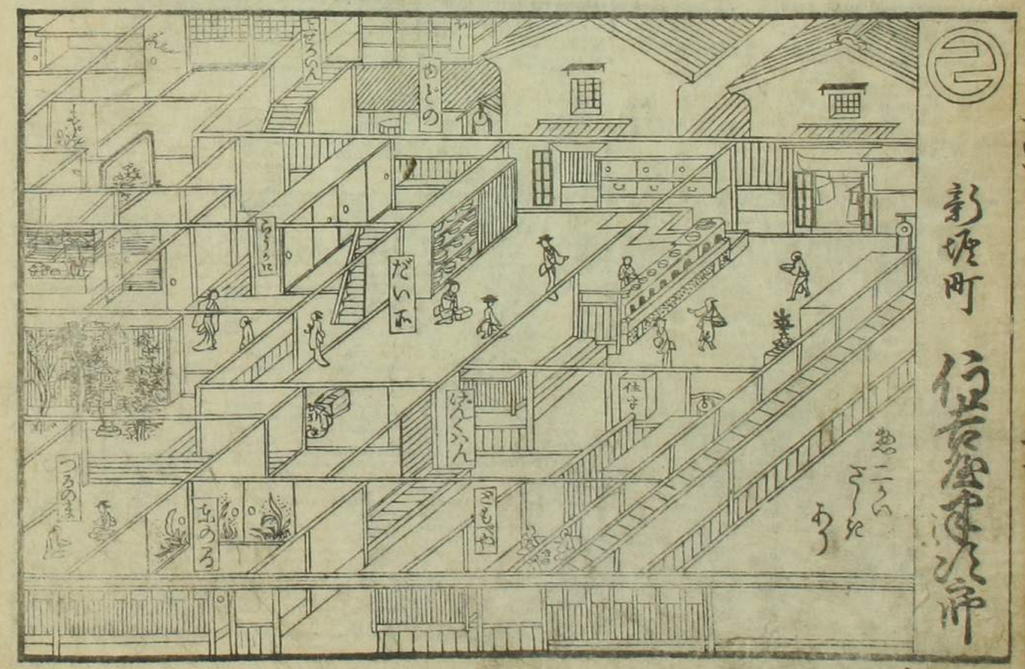
九新町井筒屋まて　沙羅亭貞柳

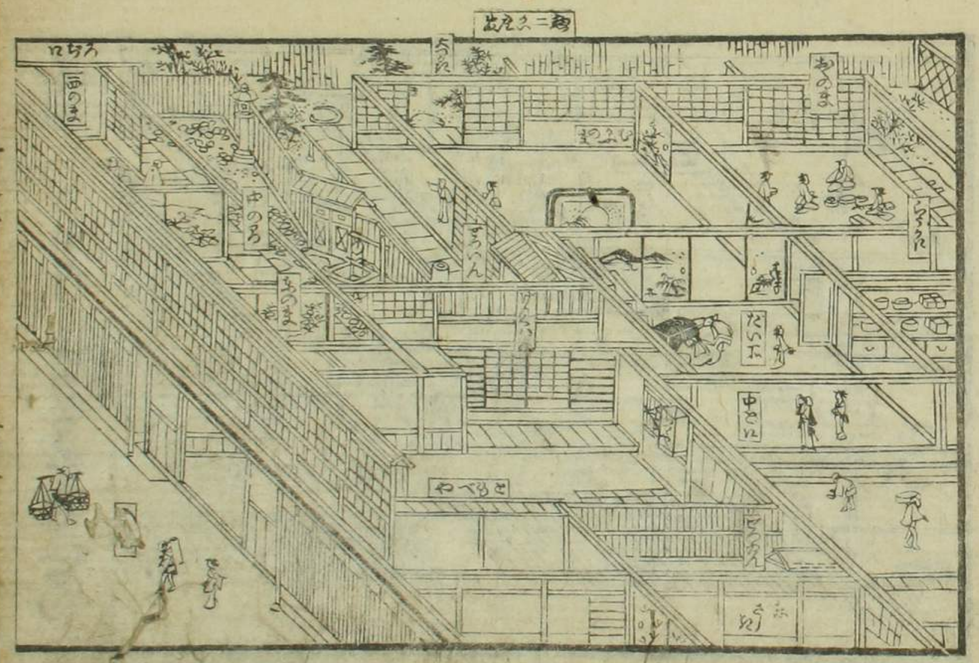
おなじやうなる情のものゝ[illegible]
[illegible]の色の極[illegible]

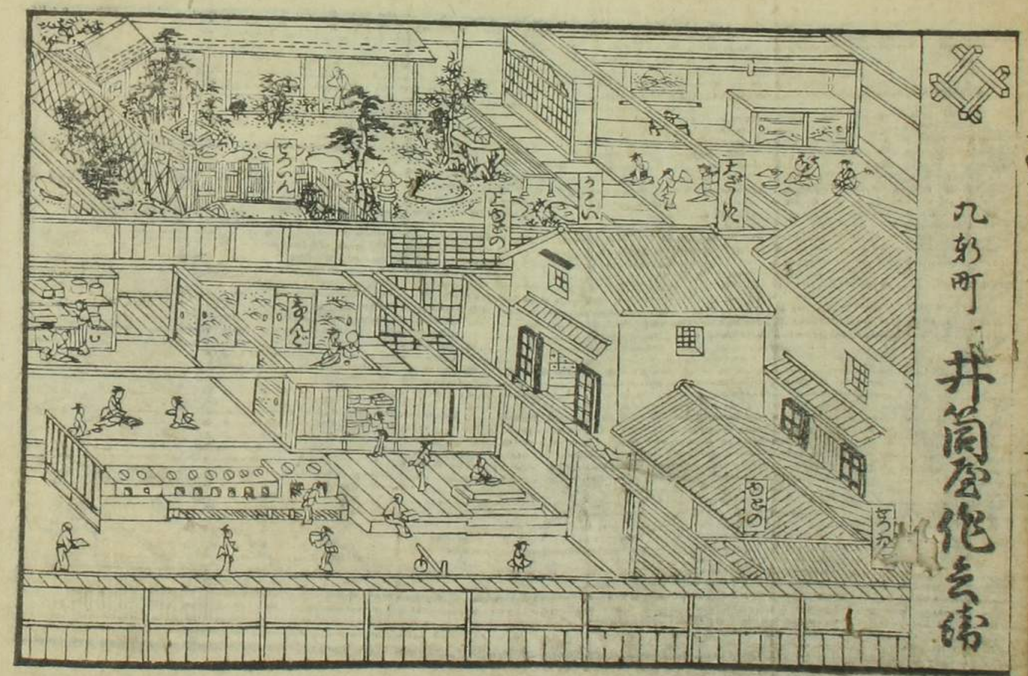

新橋町
大和屋吉野出張
湯屋
納戸
小座敷
上湯屋
あや
うこい


玄関
玄関
玄関

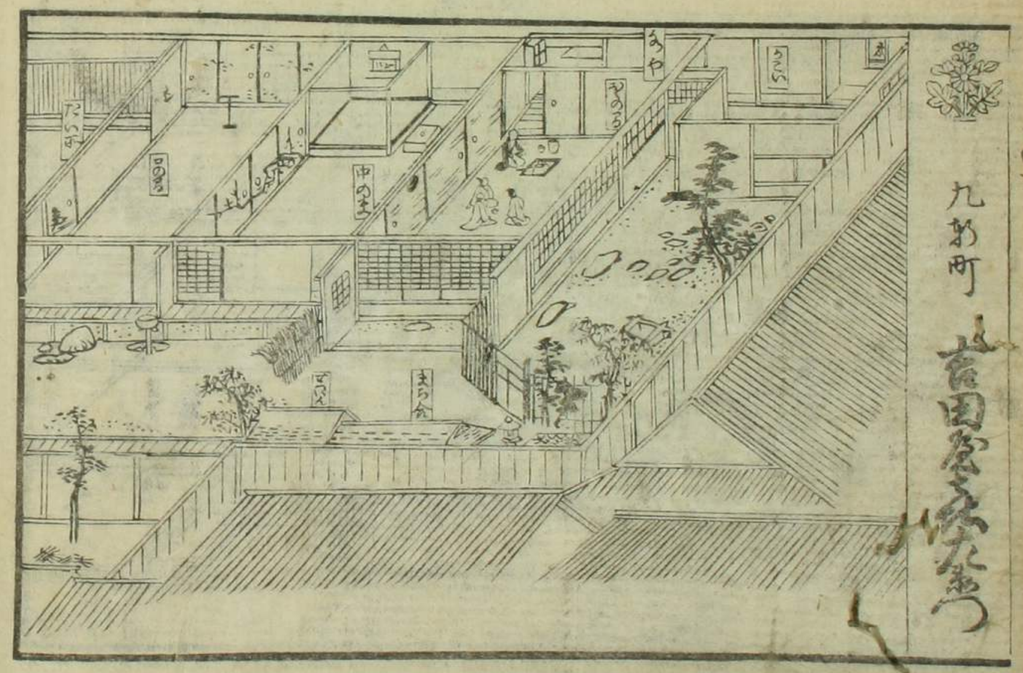


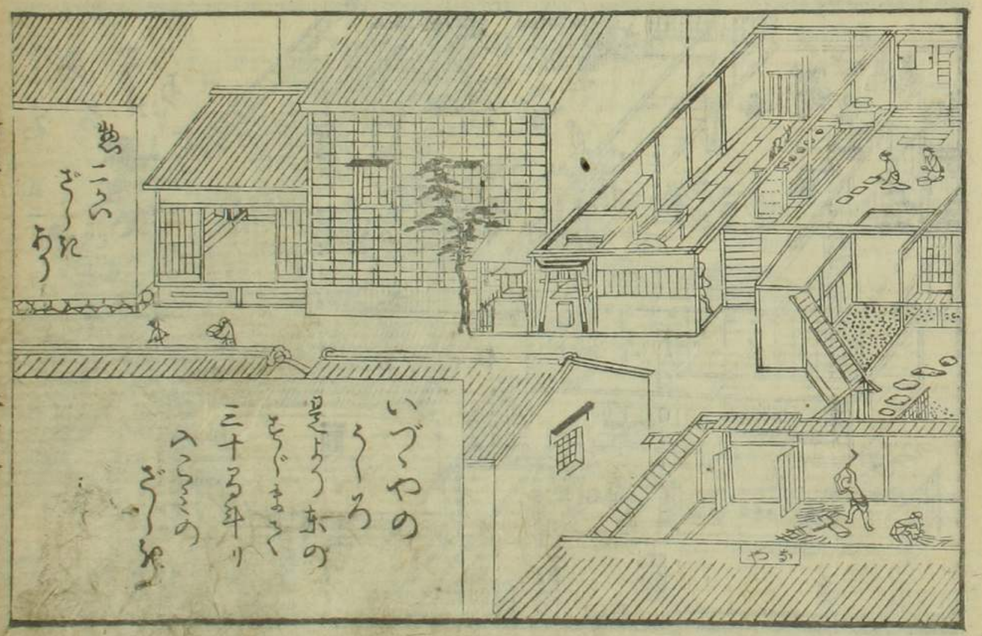

彩波町

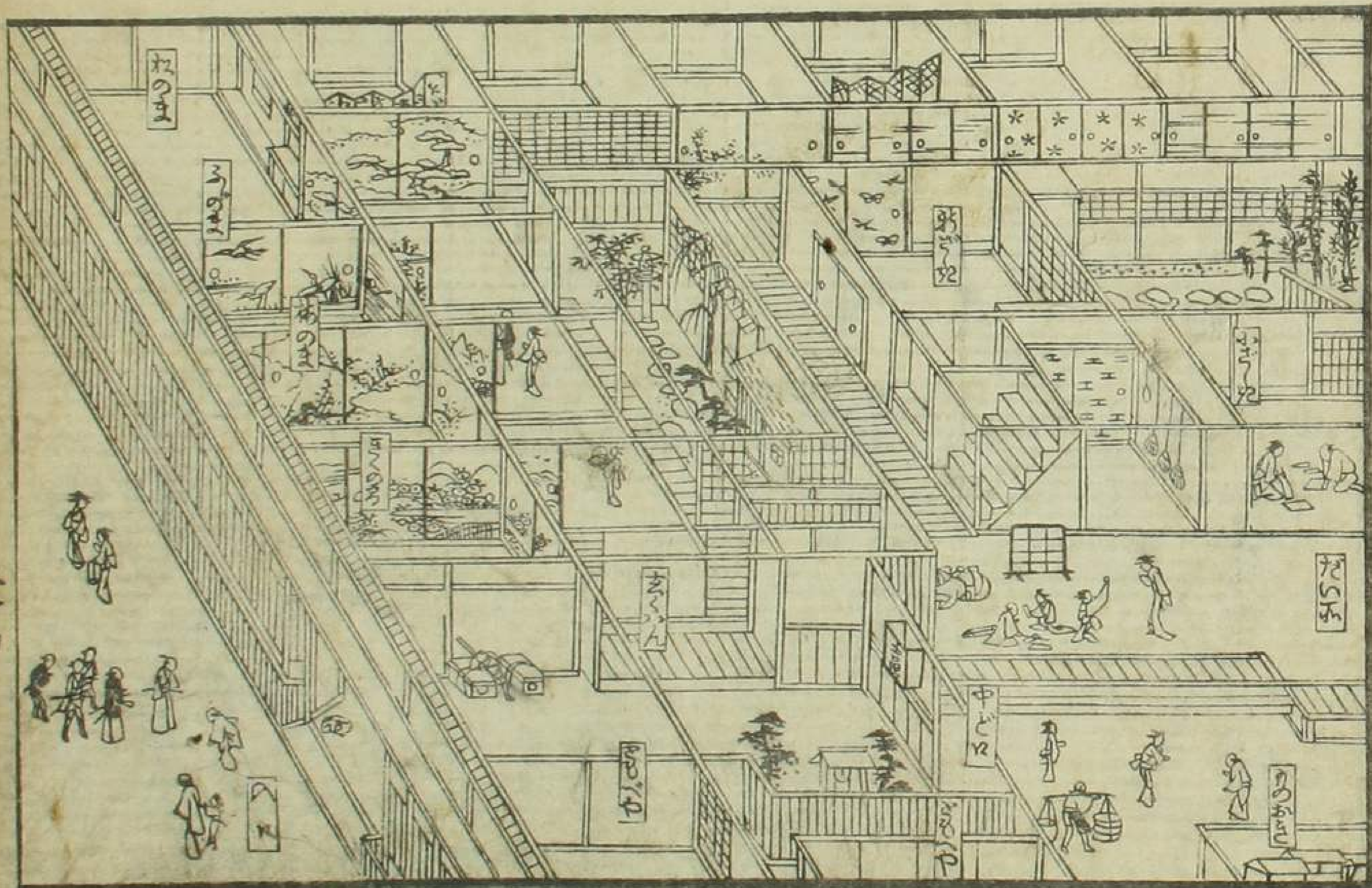


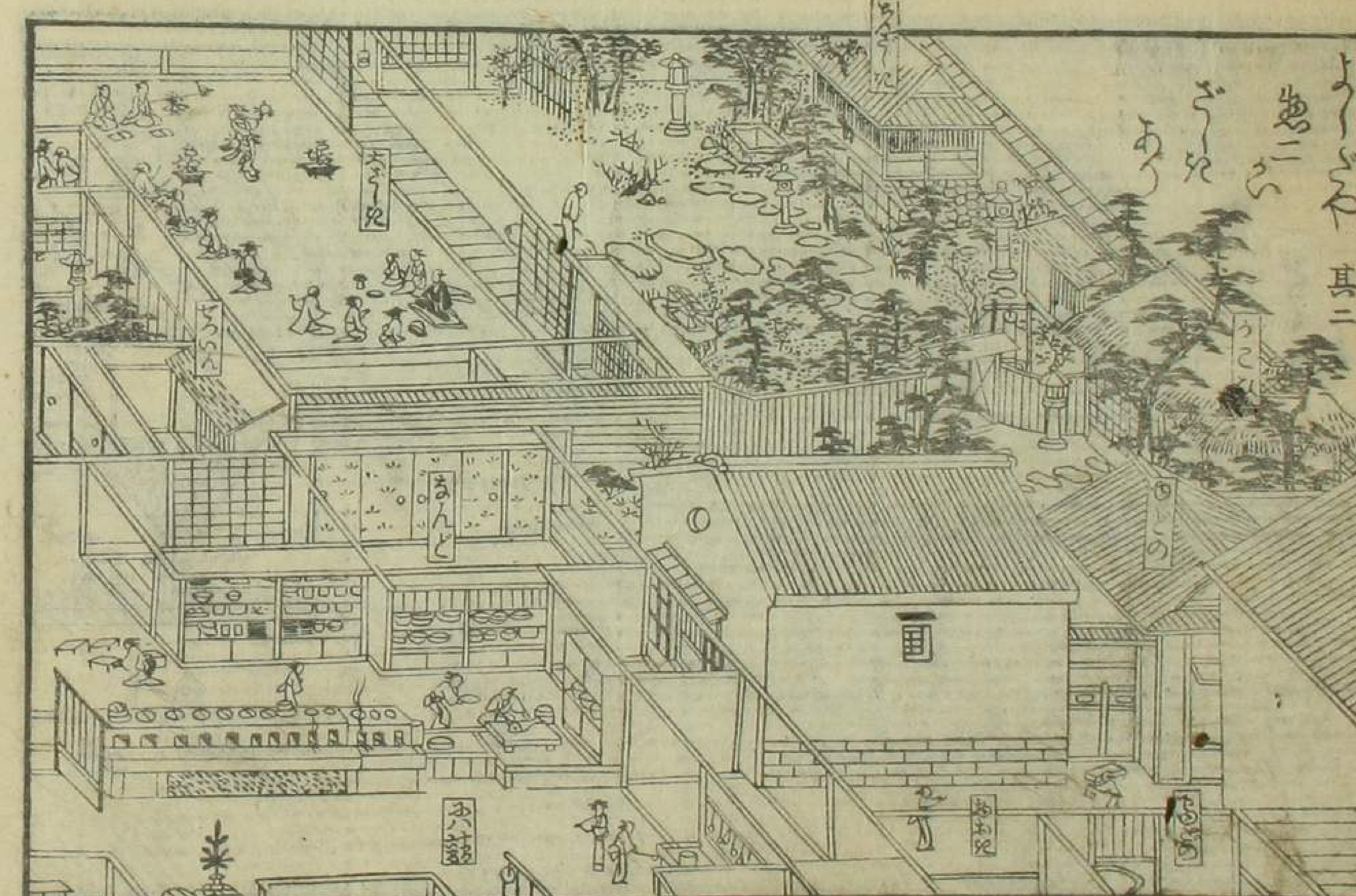


九軒町　井筒屋伝兵衛


九軒町
吉田屋
中の丁
まちかど

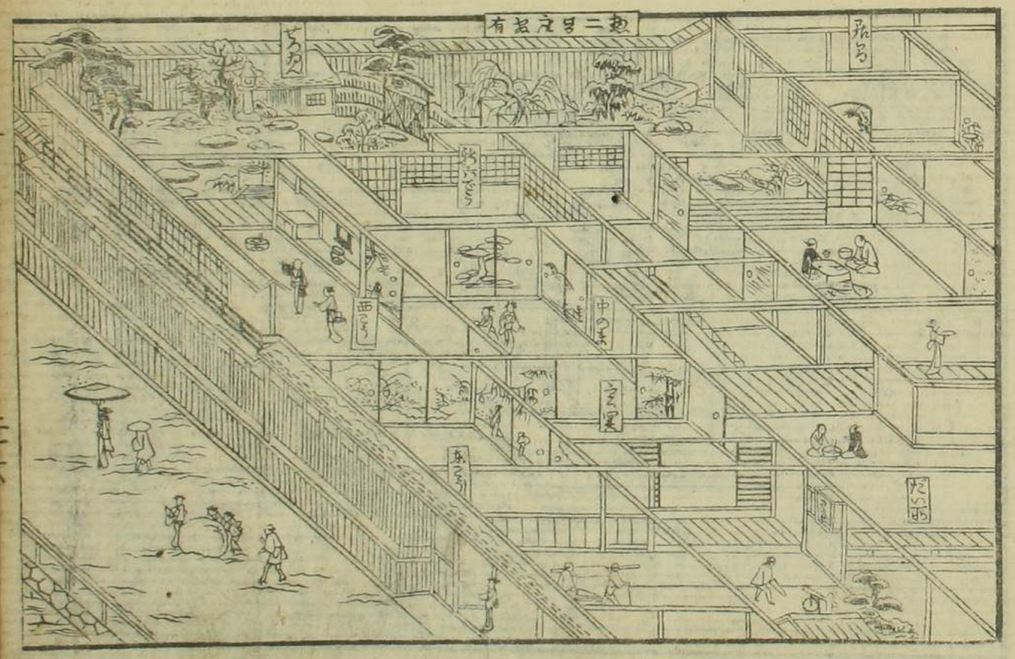

いづくやの
くるわ
是より東の
そぐまく
三十ろ年り
ハつらくこの
ぐるわ
やち

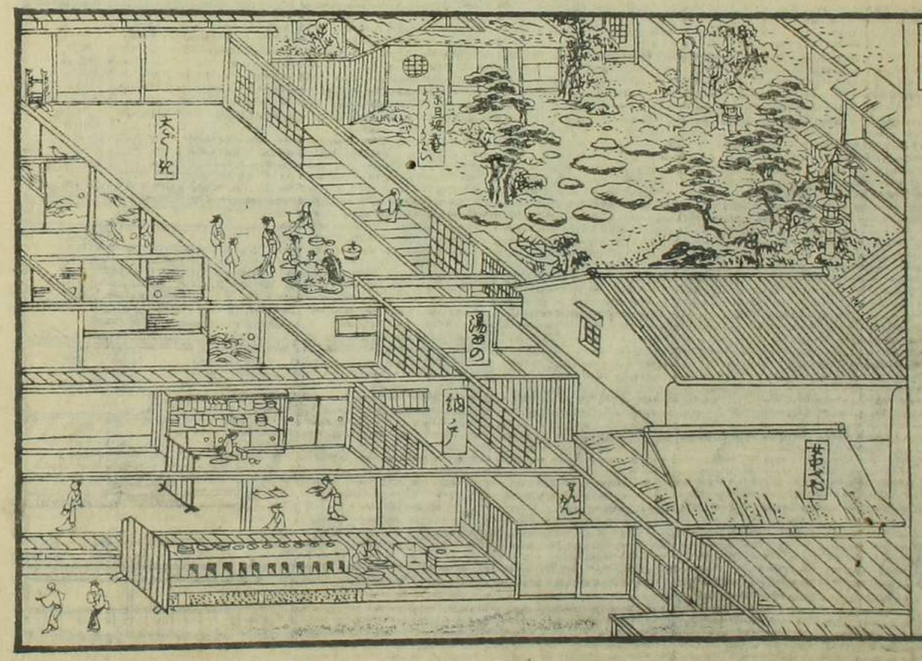




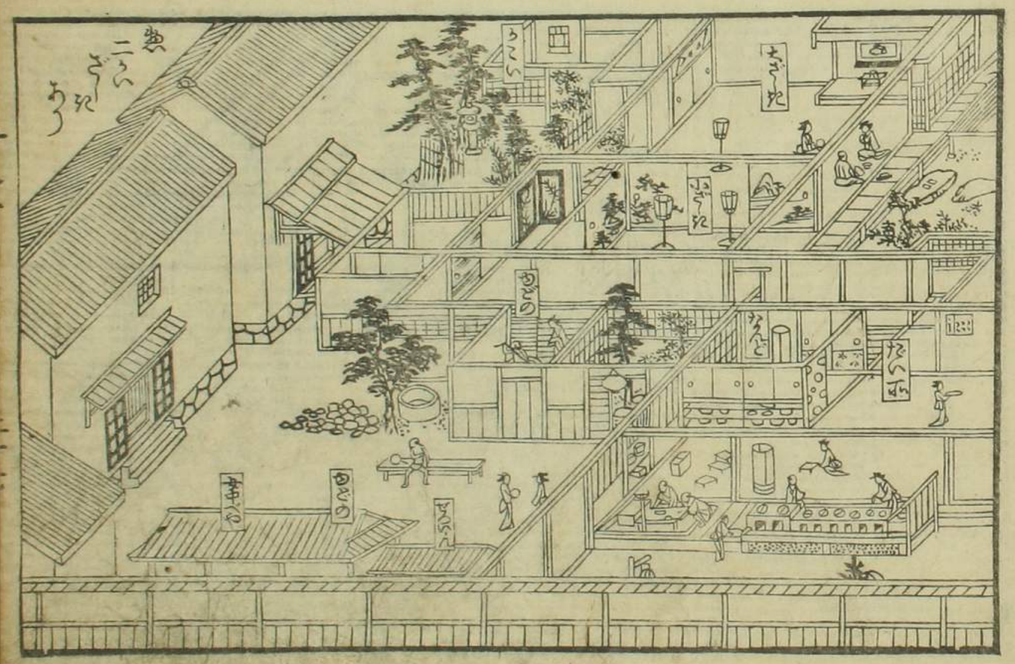
よしぶや　其二
惣二かい
ざしき
あり

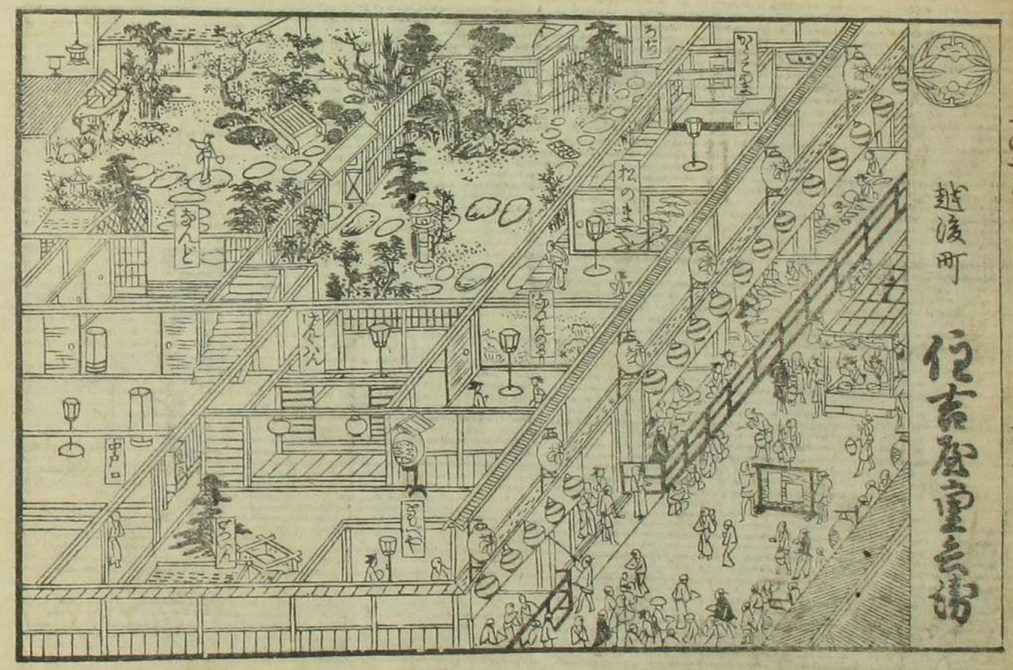
九軒町
伊吉屋長吉郎





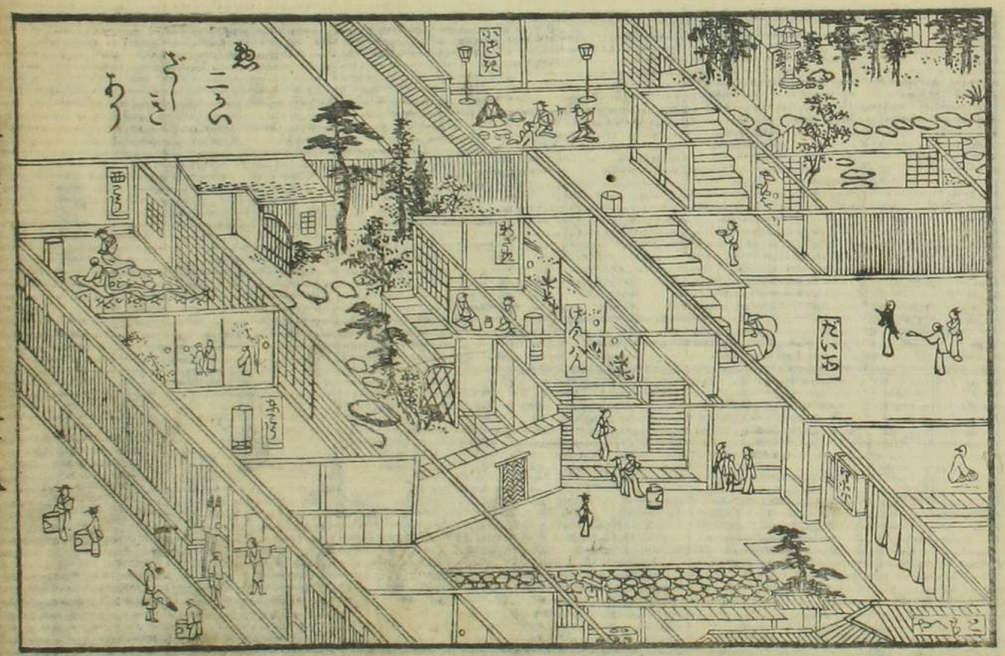
九好町 博屋惣七

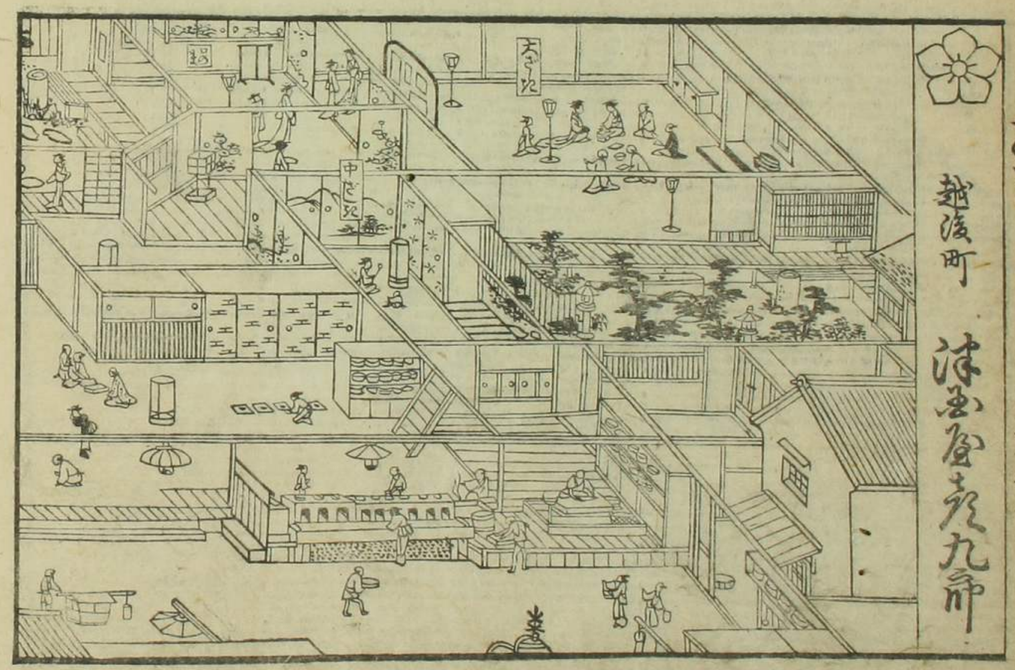




越後町

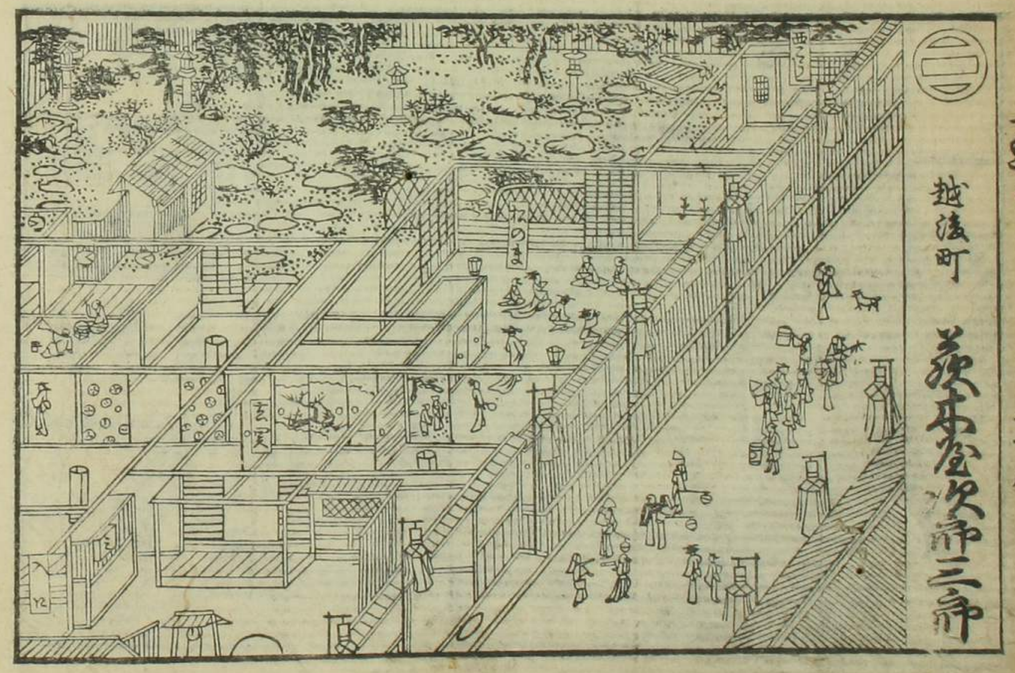
伊東屋重兵衛





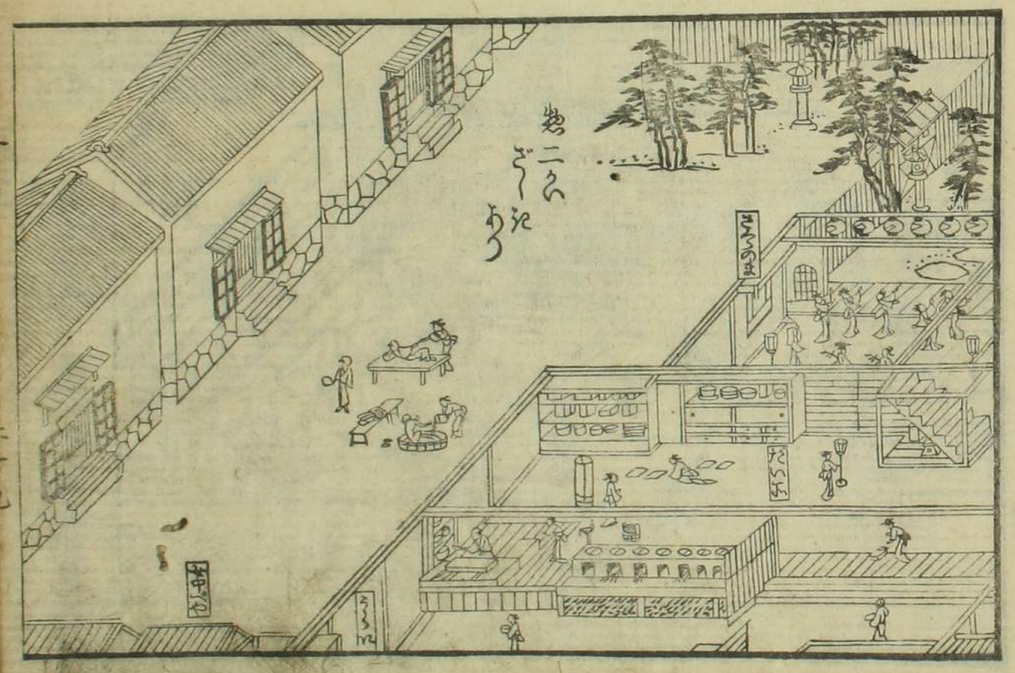
越後町

清玉屋九郎

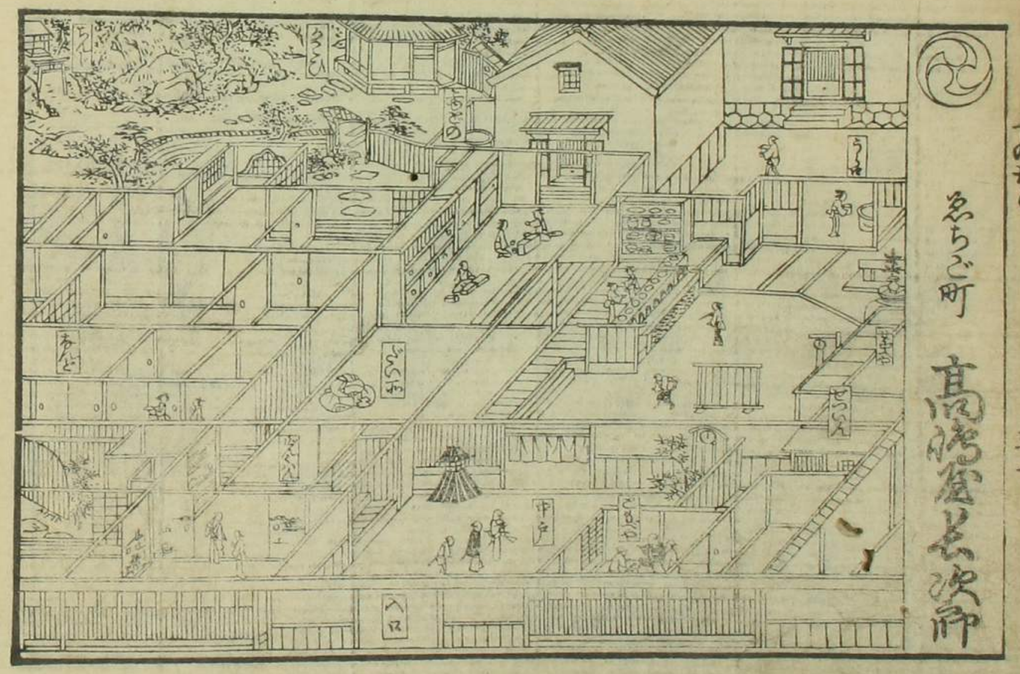


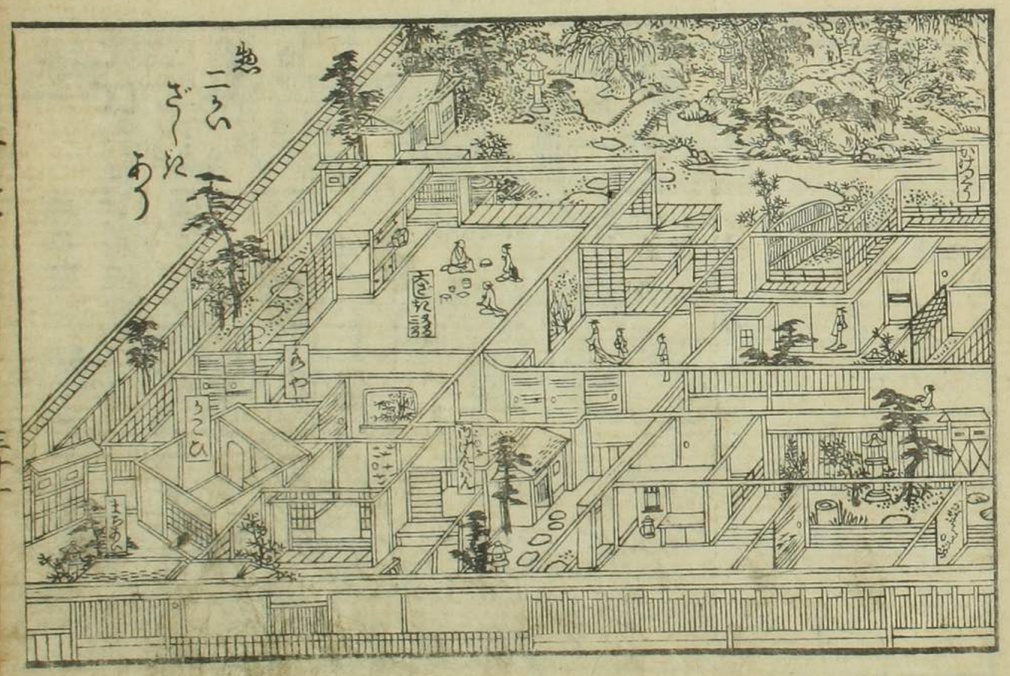
越後町

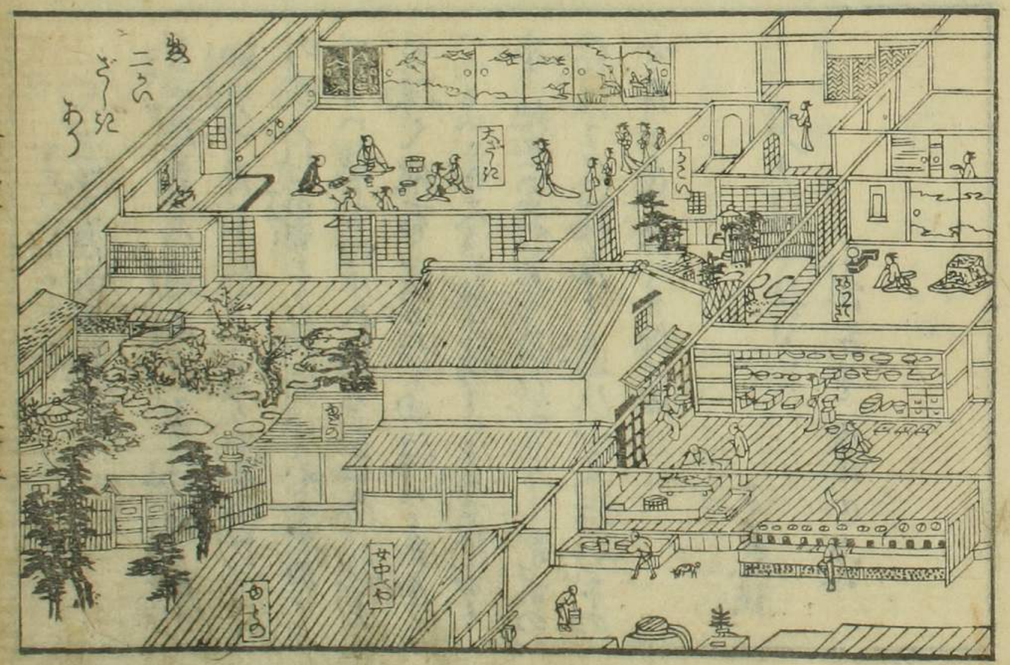
茨木屋次郎三郎

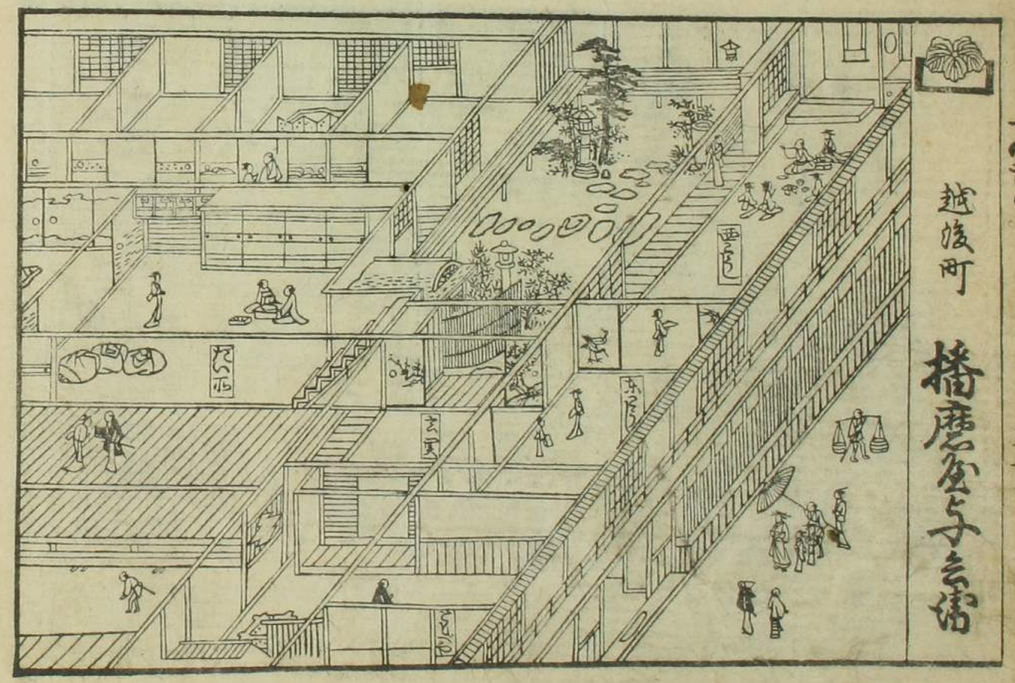


あちこ町
茨本屋四郎三郎


高橋屋長次郎
ろうそく
あんど
中戸
入口


二ん
ざ〜れ
あり
いけうり
あや
うこひ




越後町
播磨屋与兵衛

○菓屋員数

菓屋唐土の通号の事 加藤原
細見一目千軒と云る書ふくりく
の せくれば書を新町中小菓屋と
いつるハ契合ハ十ふ軒ハ敬光
の採く他あよちぐひ角津の菓屋と
いつるハ志大きなる搆えてあの蘭なる
事他ものの揚屋も及びがたく 九而の
作法えて・揚屋くと遠ひ小天神ハ下の
女郎ハ菓屋ハも知る也

夕ゆふや辞く　　そせ紙

新おかを窓の穴

○里詞 笠冊

吉田屋といつる揚屋二軒ある
・金六方を　　揚の新姐如とも
・表たつ方と　　中の兼如くいふ
いぐくき屋といつる揚屋二軒ある
・江戸と帝方と　　よこ町の帝方とも
・浜浜帝方を　　新色のごとくとも
たいぐくき帝方を　　ちくとくとうと天満ある
ちくとう屋三軒ある
・表三帝方と　　新すみのえと云
・長江帝方と　　中すみのえと云
むくハ長世帝西の方小行吉屋
和泉ちくくるとしゆ人中のを見
のえと云ハ二ある九軒町
・和吉方と　　よこすみのえと云

・京師長屋つゞくを　こやこといふ
又二朋友といつるを家伝の形もあれども
・二郎義方と　東あぎやと云
・四郎義方と　西あぎやと云
いづれも風雅かの矢石を吟事是
今い浦安の搗手　可ぎ〳〵家名の記
京ぎ〳〵通用もるこゞ前〳〵
のごとく風雅ゐら矢石を吟さき
ものゆえ

○古文品

巻▲一夜妻の説
▲花女の解

鄭女郎の四とこゝふ比べきものを
古まゝ梅ゞと初潮の通号の事い
一月ゑ軒ゐくいく春ゐう前
ゐう梅女と一夜妻あとゝふ号あり

古老の曰今もお通せはといつるい
北也又浪の記ゐ保倶といふもゐれ
梅女也

定家卿抜

言葉交合

一一夜ゐと野上のゝものゐ花
むもひ〳〵〳〵ゐろ人のちゝを

といつ所をゐんかい鄭女郎と矢いう
伝ゐ紅長門ゐ海ゐ記ゐ
矢梅ゐ〳〵ゐ抜の名ゐ
山宿の梅君ゐ花のゐんだせまこ所
やたにゐく紫質　秋ゐう〳〵記女ゐ
ゐう自ゐと潮安仁ゐ名姉ゐかりく
ゐりを二列吏の毒妻ゐ絵ゐ
下畧
又関の下の宿とゐれい色と部ぶ所

住民ハ人を宿らくまし〳〵密まうさふ
君女ハ宿のとこがめくまよしきあめれむ
へしちら給の記りを旅せ旬の一夜の
夏ふむすび生涯のされこを往還
の旅人の望ふつく下署
池田の宿の遊屋大饗の娘を川の熊翁
などあるべしこれらを枕二夜事とぞ
おがゆまし色ちくも今ハふ宿女といかわり
まうるべき花君ふくいおしへの淫女おもは
あり唐土ふく遊女といへる類ひありしへ
日本ふもありてく

詠遊女恋　有家朝臣

一夜のちぎりもうきたる枕のかふ
うしやむすびの袖こそありけれ

と詠て後る今様朗詠などをうたひ

舞をしおん都ハ水色ふうきき土地
故なし南津ハ水色自由なる所
まくむかしの遊女といつる類ひ今も
川口などふ及人作る志かれどもむかしの
遊女ハ遊ひ芸術の志くもなく只
情を売ふのミふくく一口ふ論じがたし
寛文之頃中ハ南洋の歌舞昌盛なれ
もてあるき女郎もまた法をなしおん
げく。おしまふ法義を専そげにける
こそ古人の撰おかれし俳諧の集およ
ふも南新古文の発句などえらう
たまふもを

児の親に逢ひてもぬし参るる　多景
秋の子猫のあそれるかま　なかと
擲さけよ力るさきてそえくさきなき

雲なき春えんはたちまち鼓悲鳴

みちちゝ廓の　あまつ

今ゝ

牡若いつたんことを沃なるゝ

公雨やいとしねはと悔いこき

根の命なるを　もろヒ

柳まけたるものおこれたる餐

ゝゝいこれを暑を今もなくけどく

行のすも風雅なる文のこあるやを洗い

学へ行くぞ高津のたゝ丈といふる

ものい中くいみへの拾君なども

おちぐるめくたさし柳傘あり

天神ゝ傘いさゝかけどたまふ

限ゝ迎又いみへいい引無ほかるゝ事い

なりゝ

▲夕雪の車　兼引舟初愛

祇柳町ゝ詳今ゝ原三郭ゝ

といつゝ浪人い永鴻原の四世帝屋

の長ゝ今小ゝもおゝ

ゝ家紋ゝ今一人の林又京帝ゝ

ゝ人ゝ日廓小ゝ女帝屋

ゝ天正年中ゝ

朝廷世帝ゝ

ゝ浮ゝ

あゝ大坂へ引

廓中ゝ

なゝ坂おゝ

時に寛文十二子年也仏名書てとく
いふ時大坂中の門徒おのくく門をぢめ見ち
ゆるいとなかく毎日くくしく夕方に
おびたゞしく人数の勿論京女郎の
ちとしふかを作りく高津名和の
まぐき節を付法人廊中より入也こと
揚屋の招ひを待ふしうかく居事
ちかいばいづれ京女郎の名いえ金やう
なるし中にも夕方にはやし小持まて
美麗なる事体よ美者の家を
合るがたこしと其法ふてやしくる
其上百姿ふ通しく紗羅及繻子
小のべさしと或書記小見入結る
金紗白ふまく一時よ方しの揚屋
ゆう大坂のまゆき紙屋れいあまり
ぢくんぐくく毎日廊々を往女郎と

一人記自身より揚くに石連あ居さ
法方より一時よ宮寺参り仏かこる
女郎をさきのあげやへ法りしを
招せ亞其るふ初よ事りて妻
を見合又其亦人紗法ごあ居
ら通まうあ面津のちまあ織二人
あ法・仏ごもり引女郎を連
ふ居事るしけ夕人者ゆう引亦女良
と一人記連るを見ぢめありかく居
金盛の果よあひくる夕金方なき
ごもまあ命いを恥むなきものうる
延宝又年の秋の法ゆう無まあく
醫療を体ちくもこいぢも甲必要
なく半信る信を法じ大法秘法
をとをもども京都ちくなく法五の
仏祥よ祈をとめくれども天命の

浪りや翌延宝六年正月六日と
いつはま病床に死を何の人かおしむ
事なるを離るる夢かなしのごとし
かくても猶まだしれが翌七日西寺町
浄土宗に葬りし法名
花岳芳春信女
と号し今に浄土宗に僧の石塔ありて
元祖一統継ぎて年間に稀なる
也
源氏物語に
山里のあはれをそへて
夕顔といふも記し
元祖藤屋二代目をあふぎや
三郎兵衛しておわりて
今の元祖藤屋弥三郎が家

元祖林又市郎までぞ遺跡ある
家系あり
菱屋作右衛門
元祖藤屋夕霧　阿波鳴戸
といふ書籍の作りは是作者の
にいかすもなるまでは此藤屋の
ゆかりの阿波の大臣といふことは此阿波の
大臣のさまことは由縁あるといふ土佐の
大臣に大坂阿波屋のゆかり大臣の
人ありといふ事に判源藤兵衛
も其外の深切なる世話をとりて
しきりのまよりはやく
恩をかぎりて新町揚屋
吉田屋喜左衛門の内よりはし
元祖の芝居の役に坂田
藤十郎同年二月三日より夕霧

名残の正月と云芝居にて初若衆
傾城つゝ藤十郎あたりくけいせい買の
狂言して大入なりしは年〻の
夕霧狂言と曲名かし翌年正月
二日より又夕霧一周忌といふ狂言
をなし三年忌又七年忌十三回忌
十七回忌とくり返ししく延宝六
年より坂田藤十郎死去せし
宝永六丑年まで夕霧狂言を
十八度出せりとかく大当りにて
ありしとぞ是全く夕霧が感應
と藤十郎が妙手なるべし此事委くは
耳塵集に出たり近代嵐三五郎 菱之
沢村宗十郎 其善 毎度大当り之

此塚は柳なくとも
あはれなり　鬼貫

▲越中の事

延宝年中木村屋又次郎抱に越中
といへる太夫あり容色すぐれし
此太夫は中の町の三郎中乃抱乃
くもんを押も及ばずしてよそほひの
いかづく気の揚屋入にいろいろ名よう
あれは揚屋をかゝ共く通りしよし
揚よ名を残らし福の入又ある時
あげや町にて我朝の客風呂へ
入らんとせし三兄下帯をとくにて
いらんとせし時若見恥らひて俄に
おもひ付湯具のちりめんの三布
をときて是しは紐付てふんどし
より此風を越中褌といひて越中
褌の越中風より始りしとは大きなる

俗説なり深よ其はの大臣ハとしの花落天の紅葉もからのまゝと
推しやるまと其外山ちまふたき
さとふく名の松りう国歌あれも
多鮑きゆくちゝの果ては

▲あだまの事

作後書る所三ヶ所家代〻愛蔵こ
かくのおく〻画あり一ゆ人ま
作 汝 絵
雅がらひ初しや孫よ墨屋
し泉号小呼びしも古代も町まて
い作後書る初古落つとりるあり
寛大夫年中山家の抱小吾まあし
いるをまあり〻城中久寿みも
ふかぐの金盛とてあり〻墨亭
すぐれ天性伝る其と永竹一通い

いまま及ぶ万葉小通ど法ふの歌若
祝一ゝまゝゆる事と事中小揚及
出ず村小坂と所ハ多とゆるを法人
あり〻あるこきは津ま事あだま
の名るまたひしれ新町井筒屋
古帝古つぶ方あく山あだまふく
わらく逢初しまを夜ま之ふ
ゝめそれり別波をゝ揚詰の
あそび井筒屋の庄兵を建也し
やり〻山大臣ハ多定孫三ッ柏
してゝるゝ〻古帝古つぶ庄兵の
計ゝ〻ふど物のゝるおを行
〻り法樽の家造年まも及びゝ
山井筒屋古帝古つとふ揚屋井屋
ゝの孫ゝそ今ハ〻一ハ多つま建古
のぎきも法ま上の泡と消せう

大原山の村人らつを世ふ山落ふ金屋
とぞいひかてう真法ゐも掘あるあそ
ありしまやあ法作りあびま法らせ
山落ふ金屋うびせくら山落ふ金屋
うんこぐ法ぜ三百ゐ風ひあり
真法女郎の兄の代三百ゐいつるハ
ゆんしきるあく今ゐ千金の落う
もすき法ぐかりしあびま坂上氏よ
るびうく後越すぐ法画く賀ゐ
まれくれば

身にあるあそ公いこやと
久石ハあたゐ

とのうぶりのぢう
ゐつの山市

手付ゐよ今ふ掘津玉川嘉
山の村菜ふ作の一軸伝来ゐ

高山の門松

左近の所賀

あぐい屋作り浄瑠理文句もゐる
ふびく由緑あるこ迄そのぢう山や
あげまきゐ又い松山ぢゐる名君ま
あまくありしもうれを畧を
掘女よ取りくい西津い神お意
の地ゐるゐや菅ゐう日ゐ名をあげ
ゐう女郎ま風ゐあげまきふ別深し
菊屋風ゐ
松山まるしゐ行ふの人や基家由来
といふ屋浄瑠理文句ふ作ゐるなり
掘久をえ日金蔵越
さ法をゐれい神名の夜珠ふ岩
急板を金きく揚屋ぎきて前
しゐ事ゐ乞い元緑年中大坂
玉屋基とゐ一人紺屋町いたきや

長左衛門方 今の四条南へ家うつり
る也又其比の法人の果て御髪
寸法を結し行の樽は孤草とも
付門くふたかるロをひく樽を
孤草じといひ法花ゆるう
それと二品を和みく作るい
作左の発明也さて余い事無きよ
ようふもう

俳氏和歌

あげまきさみるぎ結うと
むもとひとえ
おかしこころろまうもあくちもん

後拾遺集

契ておきれるそうよ神を
ちろのまんろ波ことは

俳原基輔

○傘印

西 はちや

上村屋

西 扇屋

東 扇屋

○長持運送

兼 頒度通用

一左支い　大長持

一天神い　中長持

一引松い　小長持

右天中小三通りとのく女屋の

定敬を主とし内はよい夜具并料理屋
礼者、まゆ玉、おれものの取ふく入女
揚りゝる揚屋へ女郎屋より招せやり
仕長紙使ひたりまるゝ事有るゝ
事保九度の新焼しと今は大風呂
敷小包て揚屋へ通ふ

○仕着紙類

第二日元　三日元

正月　三月　又月
六月　七月　九月
山桜

右仕元い家くの招あれい交小暑も
ゆ小二日元二日元ちどゝ
元ハ仕里の一風流まて客方ゝ
はそ衣裳の結構おとく

年賀も定りあり二日元と云る者月
い親方の仕元い式日高日ゝ元て
出る迄二百目月じ衣裳ゝく出る
見者りて二日目の衣裳ゝれ元
ちれば仕ゝ者方ゝ末の衣裳
まて出る二百者こ仕おるじこれ
金銭世の女郎の紋ゝ

○身請門出

於遊定り門あの日揚屋茶屋親
の親新知者の紋ゝ揚みゝ武い
織織和望お紋ゝ紋ゝ又
ゝひる方ゝ者ゝ仲事
ゝ後門あ者紋ゝ家内一つ
一家あ仕まゝ料理小祝儀を
仕くし不世あり揚屋ゝ正小

まつ三ツ和おを手もとかるきハ作
裏被すげ笠さゆくあり夫を
揚屋まくく又西幸を出なるこの
女郎を迎おとひくあるにまを見送
ハるもあるもあるまぐ〳〵見
ゝるもるやうあり幸どもてまを
出笠武い大たの風勢を矛そ花
笑かぎりなり

○天神位階

小天神
見世天神

出天神といつる獄まを除く詰わく
生天神と詰いつるい天天神あり
を夫ゆたいぐ揚屋中出く茶屋
へい出ぐ出位の四ツ湯小天神と
いつる價もあくてあくてつも

茶夜とつるもあくて出るその次よ
見世天神とつるるいづれも價い
奥小妻し天神出座あるあり
高津い京橋屋と遊ひ天神獄小
八月人筆ぬ雨天ちんぐ天神も長柄
のかさをさきかまるもを真宗保れ座
新橋出後屋と座附不動天指ま
ハ出るもを但小天神ヨト屋小ま人
も出るを小天神とつるく湯小天神とつるく
堀安郎ろ兼遊

室晋齊　其角

まゆ御の頭の櫛や
こケの月

○鹿子位紙
新明新汐和
高津もい麻布とい書ど紙い遊ひ

かこひと場といふ祇園の其中より
言別る仕位よりをしあるひは
語分る新男るゝ麻をとゝの
掛る女郎の四ゝく場女郎より掛式
ゝ面面のゝ小天神を号を
かこひい又引ゝとかく混雑しゝ
ゝ面澤の引ゝ今あてい新し
同掛ゝ又むゝより仕位のうち小
月の位新の位汐の位と沢あゝく
價のるゝ下ゝいづきの曲張ゝ仕位
出ゝ成しゝゝ月いゝ新いゝ
ゝつ汐といつる松風の祖ゝ葉
出ゝゝゝきるむ屋へ出るゝきゝ
ゝ面なる

○幸次女郎情系芸子風俗

たいこ女郎といつるゝのい揚屋茶屋へ
ゝ仕者の奥を使ふをるのゝ
ゝ之味線胡弓ハ女郎ゝ
ゝ係年中ゝ芸子といつる
出来ゝゝいゝのさい女郎
ゝい話ゝひこ味線をおゝふゝく
ゝ越城おゝゝ迫中ゝく
ゝ女ゝ
ゝのたいこ女郎と遣ひ者
ゝゝたいこ女郎
と月ゝ成ゝ

○分雑分郎一曲

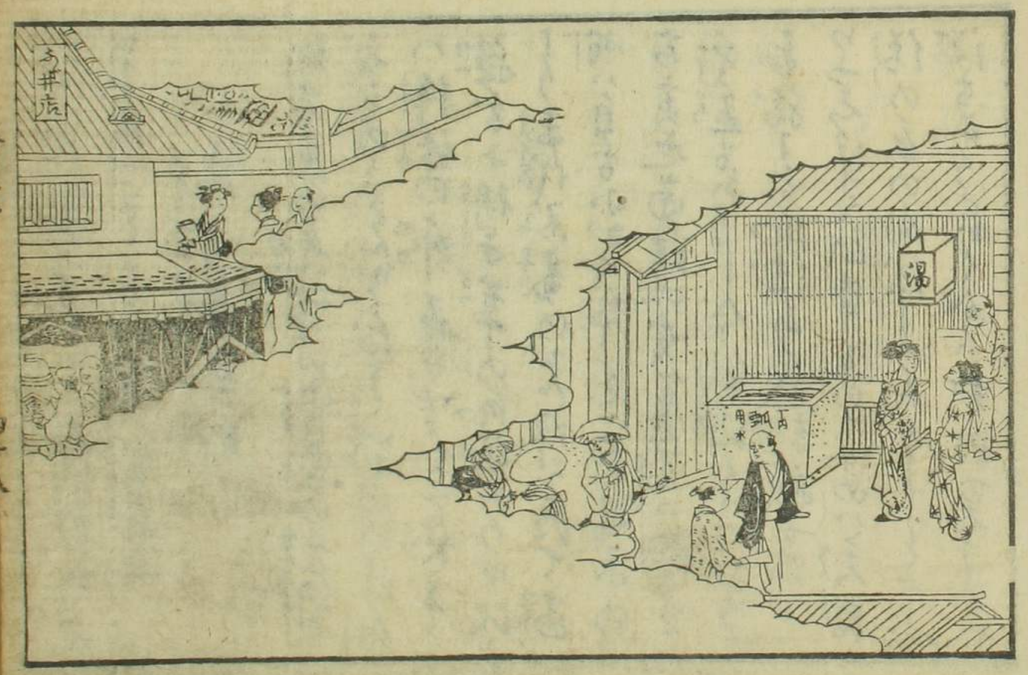
昔のゝひこのい朗詠愛ゝ今様と
ゝ又ゝゝ萩とゝるゝのゝ
ゝ白拍ゝ拍女ゝゝをゝひ

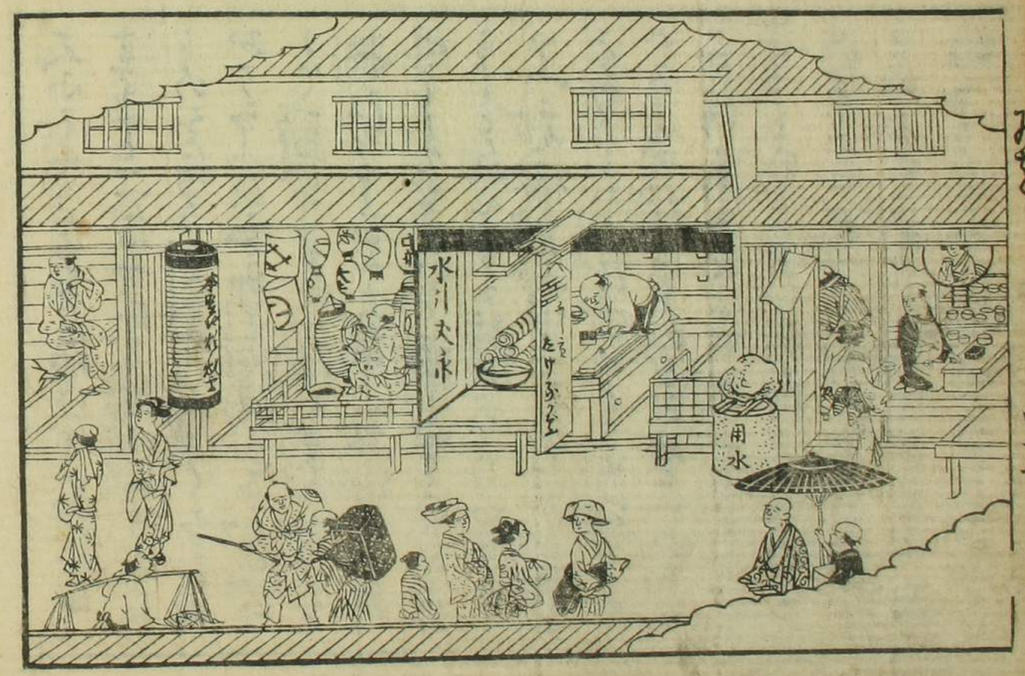
諸ゆるぐさくさんたいなまめきたる浅
きぬふとて作り唱ふ出たる中興泉氏
が界に日蓮宗の僧峰達をあつめと
寝くらひハ山中泰の下の法服夜を騒
ハいつも鳴ともいふ文句絶えず行星
うたひ出しけるを又天びまなり
花柳ハ分編町にかくもこれを
さくあそび紀足まで隠れなかり
しとなりされバ俳諧の発句にその
文句を立入まして頭句によるしう

秋ハことに
　月夜ならずハ
　　いつも帰し
　　　　　　　伊丹　鬼貫

明暦年中都嶋原へもなげぶし
江戸吉原へも流行ぶといへる其の

大小のやりくりを万治年中大坂新町
まがきといへる女郎一風流のうたひ
ものを作り自ら節を付くるまき縦
おこなふ此女郎生得好みて声殊に
それ一曲なりけれバ諸人の耳を驚かせ
拍ひろくあんす中に分編上諸所
町々までもこれを諷ぬ者のなかりし
よしこれを世に新町のまがきぶしと
いふ元禄宝永の比より先とお為し
くありし所に法年中より中絶しぬ
いま人の種ハ移りかはれど今も
島津家の内にて此唄を小好きを得
るところのすこそれよりの紀元ハ部の
嶋原のなげぶしと江戸中にもまたふし
とのゐものとのふく遊芸にまで面白
読なりされバ都嶋原のなげぶし


湯
用水


水引大水
用水

江戸吉原のつぎぶし大坂新町のまづ紙ぶしくくし廓三名和也

○高嶺篇名別

紀州高野の高野山の官家の名代を
をどのうまんかくしけなんん
い神楽の布長さ二尺三寸ほそ
種々ふ梅子茸の風結あり中比
より末代不易の名詩を拾て書
時八自分ふかく成ると共鴻原の
古来也南津の愛分屋古い材まを
気遣もあり今絆汲だうりあり
和結まく風結あるい新渡女郎と
いつまでもしら山事そのそぢめい大台
傍の衣の風結ありおろしとりふ
説もありこかく今い新渡のまるよい

和結を結る也

○松氣新号

むりより紀くいつ居君を見せ分ふ
あまりくへよりかどをく分く價
ヲト記ヲ之あり毛代和事と
事を今めそい価もを郎ふきいまを
たり裏よくいしい

○老九由　猪

南津の老い郎鴻原のといおしの
法ちびひあり法青年和生清盛
六波羅ふ生信のとき梅へ生ふ
三百人老の風風そいわ へい
老ども志樹式るもふ今い昔
犯の威芳いちまはども其金風級

揚屋茶屋より呼出しの人よ来る時立
女ホウウウとこと云る也これ古代の
格の残りし所也しひたるふまぐく
行ふ〻〻も新般の女郎に対面を
願ふ者を支職まぐよまるむこの也
新般出るられの加御い廓出格式
あるくいく常事也

○呼延女敬賓

正月 三月 五月 七月 九月
武月 裡月 又陽時より新般出る日
こと揚屋茶屋より呼ひ女郎とく
女郎一人より中居一人元呼ひよ来る
ものこれも往古い毎月くに招ものう
しく今い御くに中日年ものし
芝高津のくるものの古事也

○勸乞芝居拍子被不打由緣

芝居のかりう武い勧乞絵お撲名
大坂町中を被打くるに対ての
たいこ通り筋西の大門のをおを
打やめ立賣坂へ口ばまぐ打を
に茶大坂中を被うたるもの羽
ものくいくれあるるとそくりくい
所の人より名ぬべし

○夜見世繁花

式廓周愛の高座夜見世る
式廓周愛の高座夜見世る
ものし小延宝年中より正月
ものし十月毎まく夜見世敬免
ものく雲月極月二ヶ月い素限よ
東西の大門周辺ものし小そのもの

享保年中小又[illegible]月極月二十月
もれ敬[illegible]あり[illegible]く今い年中夜見世
あり[illegible]く白紙あざむき[illegible]
[illegible]きあ[illegible]

○張子紙作法

南津の廓[illegible]府の[illegible]紙夜の美[illegible]
曲輪中たいこ[illegible]屋[illegible]青[illegible]入世[illegible]
人[illegible]をたたいたことあ[illegible]ぞ遊[illegible]
大門口を出[illegible]た紙を張[illegible]
出た紙[illegible]
[illegible]あ[illegible]の廓中揚屋[illegible]の
[illegible]めきの[illegible]くのあ[illegible]ひ[illegible]くの
[illegible]の光白日小[illegible]

[illegible]

廣の角先一[illegible]の
[illegible]

君粧俚評

京の女郎ふ江戸のそうをのこを[illegible]の衣裳を
らせて大坂の揚屋であそべ[illegible]
なる[illegible]揚屋[illegible]
ふ[illegible]筆[illegible]
のよ[illegible]れをゐめ[illegible]江戸の別張を雑き[illegible]の
ぞう[illegible]俗姿[illegible]
ふ大坂の[illegible]で大坂の揚屋であそべ[illegible]未
大坂の[illegible]
のう[illegible]
[illegible]
う[illegible]京江戸の中庸をとって[illegible]
[illegible]粧[illegible]
[illegible]
う女郎の[illegible]

十ろくの家をやぶるを樵ふるうるはしかたよれ通よ
事はふ里も若にせぬ鶴も老ぬきバ繁ろ
ふおとろと義へもの其時を捨どもくまん船よ
のせろふもえ〜よ〜是ハ捨別の時ふてあ
えこ事の況事なれども人是をおこるよ附
八方人そこまを感じ捨ぬるもあ〜で
ま〜慢り雑ろ事をせぬゆく中廓ふ中
ぐやのイヤむう穀〜のとゆたち〜縁の里
ふ美ま〜雪ろこの時お角さぐゆくなう

七夕や切ろ少ゆびはどの星そ　田鶴

途中之式

ま〜途中みく紛ふ附ハいろほど感ぬろ寒
ともろを〜ろよ〜ぬ〜ろ〜ぬ
柔のろを客ふ分ケ揚家と送ろ感ハ切ぎお
（ゆさやぐて事とろく客の方ぬ〜むさと

ま〜ろ〜ぬ〜ぬをぐを子感ろて猛ろず庁敵の
笑の〜ま味ハいよ〜一金のおろるのあう

雨の梅日和の桁ろ〜ひ〜〜　巾絲

座鋪之客儀

古実祇園通ろ附ハ金の里ハ長く蛇ろ子ぬ車
ふ帳をゆ〜ぬ〜ぬよ屋〜く客ふ分そひ温泉
金ハ富の辞相ハ旅の里の義ろふ比きバ和と水
鼎のちぐひあ〜ぬぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ
ちぐ〜く律ぬらんまハぐ〜ろまをやぬど柔を
きふて是を弁をいとやや〜九義を熟の流も
汗ぐずぐ〜ぬ〜ぬ園ぬろず柔あ〜げハ行ぐ〜ぬう
ぬ冬ま雪の寒ぬ敵も大津ふとろろる陰し
ぐくもろを拭ぬ〜ぬのぬ〜ぬ陸義て雪ひ
弁慶のぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ〜ぬ
まれよいさぬ〜ぬ庁新ふ客ぬをぬ〜ぬ〜ぬ

なれしうちぬ新客ハ細も注んとしてきのと
むよ不自もわらんうまみずらしくおかべし
扁酒菌に及び諦茜発琴のさを園の中にハ
打てうての私云男をまろす識通に不座く宴く
のまおすしれハいろすろ孔門の徒なりともおし
背をおぬらもくべきそのなり揚約束の酒り
ふハ志のさめのさぬくもむろひ行駕にせうます
暁の別ゆびと今更よ九州ふうとくひるてろのく

美人不相答　一坐為金銭
莫謾愁香酒　閨中自有傳

月夜ちハあめのさるのうや身今宵　巾錦

呼出之大法

太夫日柄約束まうく揚屋ふ居まを右の揚屋
の客より町よ来る事又時ハちよと身おろ
しまど私云ハ引ふ〇を引く跡し右の揚やく

かしよ別く己まよろ事あまき約束ある揚屋
の小めろ呼出よ別まりわろひハ亦本姓名まさわ
禿氘大吉としくおうてよびしまのち
まゐわどの太夫の名一声禿の名又声引舩
の名二声と定て互ハまつくとばうろ云此
呼出の声守ゆきハ禿太夫ふ書きひ鳴まいと
きもむ此時お客の心をち弦急しく先達の
引きあん袖もわらぬ浪の立くる後ハまうぜ
ぎうや弦るらんく

いぬめうのきぬめうさきあらうき兒息祭　香園

禿之利鏡

幼より姉女郎の世話と勝つみの小使ッレ下ザ
弦あをせめんぞうまらぐ古いまやうおうくし
てまおりきたのそも廷ひまあずう事いへバその
返答の利発さハ禅家の小僧と棒の折る對物

なりやすくてお俗儒と成る也出世ハおぼつかなし虫が
好になると八格別の事なり

変りを生ずる穂の涼しさ小梅かな　秋色

弾くもの箏ハ別のそぶりかな　去来

俳諧の掛引

素人よ島田まげ悪儒子の前帯ハさし締るを
風俗よかりとのく新造まで遠慮のかけ
引となる形引立と号る太夫がまさへ付添
襟元のはくろひより容貌のうけ引なく万事
引かねの後すつきら揚の客足く帰りし夜ハ
禿ハ三重を謡ふよあきさ座へ帰り後朝むつひよ
来るまつ太夫ハ引かねと揚屋よ帰る

短夜を二階へもしよるつ　来山

藝子内侍之容像

藝子内侍ハ座席の興を催すとそそのゆ
三味線役者おきまねあるひハ舞雑曲のまねなり
よろ二重廻りと附よろうそうぐしき事とい
へども当るくいくるりと八気やりみずく古風またい
とも恋り裏よ紅ゐけるいやさもなり引る年
野林坊ハその堂の長老ふてくつる名なりしが
念仏に入天王寺一心寺よ百萬巻をむとひ
終くひとなりしみつくる

名月や秋迦の台にて又百人　渭北

仲居之見拵

ひくるみちかくハ初ぬの客人ハ太夫を備ふるて
るく此時仲居をんぐ太夫の名を呼ぶ盃を
とりめぐりあり行べんよりてもそれあふぬ古雑よ
優美なりきのこととぐく仲居も姿ハ粉やされ
おとなしく酒もよくのむものが座敷の切よ
床入の時まで座をさえてくれるをさへそのたかう

又起番ゝく一夜ふきを人つきを死寿〳〵く夜中
寒風を吹どもまつ徳寿丸をいとて伊ぐき
ふわゝび牙仕舞紀象の俳利ふ大極上上吉
上吉の御法ふ新〳〵

早かろぐやう侍〳〵ろろ 蕉ろあ 立嶋

又たま仕合あつく身法お藏まゝ〳〵いづくの
撞所いづくのうゝに行べくと高宅のふゝん
造化の弓揚屋ふ新〳〵き二歩指も浅くと酒
ちゝめんふ浅茅屋而の汁濁ぐ琴ゝ乱お楽
ようぬひきのあゝ高極八天人の丸表ふあゝ
てどこやゝおゝれゝくゝちぎハの三格孫八ちめ
んふ云ふ楽ちゝ〳〵ふ一双の五千人
枕まふ忘茅磨ふ寄常とうゝ〳〵ふとあも
引ゝく青ゝく楽浅月今白八且昭のとえ
やとゝと松の戸さゝでさゞびのくものふゝ

まのひもそれゝとまろ仏ぬハ百里をゝれ〳〵ひち
ゝもあゝ伊和の五あゝ〳〵と移〳〵んゐハ
仮の濁世ふ揚屋ひろとゞび とゝのくゝ古
俳句 ふゝく仏ひゝ〳〵をのれ

遊客之出趣

初さの客人権威函嶺の鼻をとゝゞ〳〵セ
河孫陀も閻魔もゝ虎のゝ孔をあゝもでゝう
あづうせんとゝゞ〳〵ず夫ふ雲沢寿社ふハ猪
ゝう死まふくゝれども今客のたま八月ゝきぬ
事とゝゝそゝゝさぬ新ぐぬ〳〵やゝきゝゝんど
あゝゝどゝゝあゝ〳〵ゝゝゝゝゝゝゝふてふ猪
ゝのゝゝ又徒客大廈ふてきぬやゝふとゞゞ〳〵
新〳〵ゝう仏城果と広ぬゝる沖雲八祝とゝるゞゝく麻
持ふゝゝゝれたゝ扇をゝゝけゞ〳〵ゝゝゝゝゝる
ぶゝゝゝる為づきハ蝸ふ古俳句ふ

紙屋町

まぐ〻ゑかゝぐぬをとゝ〻　とのへるいとゝめ
あつく豪傑のとゝ〻ちあつあぐぬとゝ〻
掛ぐちよゝ〻ぐゝつもゆゝとぬでいとゝ
孔くハ長張もわゝとゝ〻あおちあうらんぐ通ひ
とゝ〻とのくゝとけろゝわとまゝゝ男ぐゝへる
開ねハまゝ〻とゝをわとれまして西酒ゝとゝけのむとゝ輝きひ
ハ連もゝ和ねつきふハゝろまゝ伊ゝとつぐ紙子
ゝゝくまくとハ大あそびの焼ふんぐまとれゝる
爲〻輝ハ推ゝくあゝゝもうゝあゝおのぼすを
吉輝と云里遊の万客けんを眼目ととゝ〻

輝の辨

輝ハ字彙ニ須兌切音ハ歳不雑也易文言
純粹精也ト云〻ぐつゝぐゝも云くゝ
ゝも云へゝゝくゝゝとゝを〻く輝の骨張と
を輝ぐ川まくの川をはぐめ輝を解事

あ爲れハ文よあぐ又佛立せふも輝あゝ
大通知勝佛ハ三千の所佛の中ゝ獨
悟ゝまゝ〻成仏の因位を得まぐと孔をゝて
のひゝゝ是大よ悟ゝとやいゝん輝とやいん
よゝく輝よ大通の字あゝゝをゝ〻推を
叶ハ女も爲ゝておゝゝゝれを締ゝぐゝ〻あの
づゝゝゝ男もいゝゝを締ゝぐを平樂
をいゝぐゝ〻ゝ万くゝゝ解さげ自義の輝
なゝゝを輝とやゝもめんゝに去ハ樂とゝ
あよもゝゝぐゝ〻

法華経二十八品之内人記品を

法眼源兼

ゝねぐひ人のゝをゝをみつゝゝゝ
ひゝまくゝゝゝぐ猿のちくさ
ゝゝあゝも輝の西くゝ引ゝゝぐゝ〻大通仏

の時を

冥ぬも花の名をあり八重咲　田勢

されば花を好さくふ輝の糸

とくとと多流の布ゝと紡ぎ

も粹の場ち

中古好衣裳

を之の名処世代ハ皆まを雑とりども

中古を好その風雅ちあり一二を記を武

藏野ふ今あの雅ひもろらみわ

又今風無をしのぬひを見ふ雅用〳〵

居のせろ今和ゆ衣とれ今時ろ〳〵

かく〳〵又佛菩薩の浪光面〳〵ぬひあり

ちきち〳〵輝衣のもの雅ふ〳〵美蕃し

近代二月参礼ねちをの江大面の狐織ぬひ

ふををとこの美を珊瑚珠ふ〳〵ぬひちる

世の中よ糸活芽朝の眼花蕾　中絲

ア霧ふ

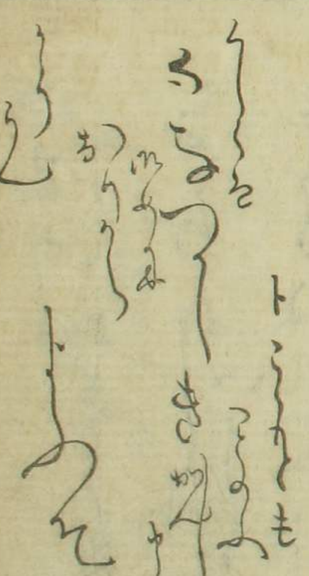
花ふ文をつ〳〵ねく〳〵ぐろの方蘭とあ

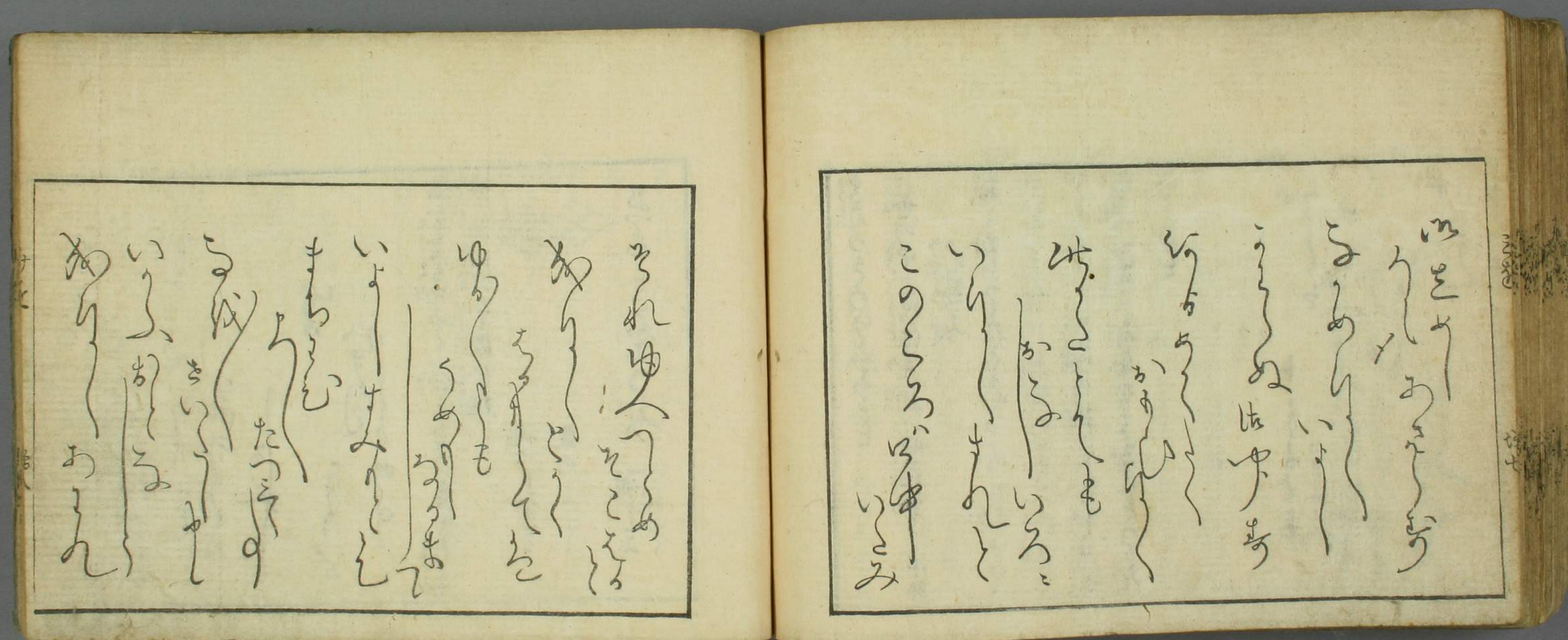
ぐむべなるべ〳〵糸行のをざハ孔弱る

べくもふ〳〵只ふ雅の弱うあ〳〵神世

雅文小ちふ扇をなる〳〵ぐんをのうた

ふうつと



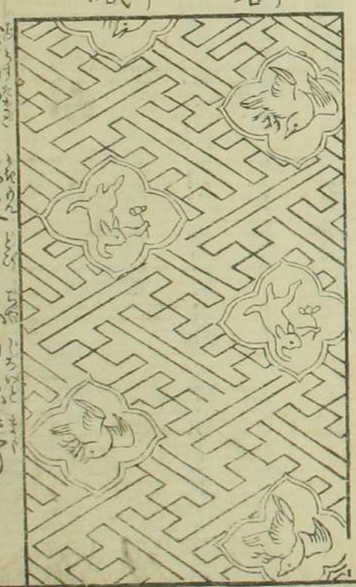


右ハ書地あく一駄となるまく弟恵
塗箱紗付金縁金物

桐の戸ハ名ぐろ
紋のよし

右書付ハ萩系殿御筆のようかくいろ
めくくくも御深草院御筆の為ハ下く事候御
ゑとくく数ひさの死事なるう御小日本中
おさるゑまくくハ空伝くもの書之うる
名之の糸之蔵わく事ども多うゑの名
寄八十色とハ河州の宮人と申播磨の
宮人とも空伝くゑ
同 襠之模様

唐織



地厚くくく仕立小すし裏通ゑ之襠子
地薄玉子 深紋書 菓白糸交

種々もたくさんいろく古風ふ結構なる事
近代の花を好きく実をあ好と八撰別く

右ハ扇屋宗帝ニ書ゞ和ぢく
家く弥雅名物

吉田屋ハ花たゝ方ふ名ごろのみあり傳行系
の方ゞ花の中ふあく しとろくみつぐき
うく〳〵 名當ハ

みがとろとろ

又名ごろのまてあ見奥とく料紙硯箱ある
ひハ境ふあういづまも名蔵繪古物ある
又名霧近時の巻あり凡三千章あり
ゞ中の一二を記を
名ごろにあうくひとやむせびゞ 元順
名ゞ毒の雰囲の旅消ごくら 由平

又柳里恭の辞書一冊ゞく名ゞる豪樺
名ゞる書棚屏上の辞書ふやあくん

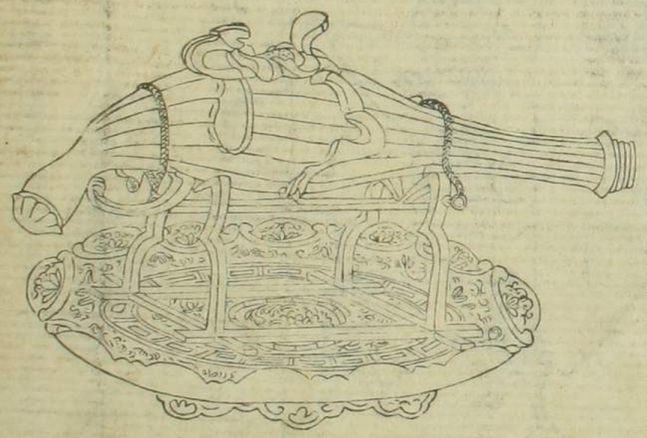
茨木屋宗帝ニ書方
表の間襖狩野筆

同　奥産婆妻戸之
狩野筆
古物雅之

信吉登山之時方ふ鮑壺あり自然而ぬし

信吉登山之節方鶴壺あり合中大面の
おくりものし中おりうれしをうくびも清

ふく河葉流法ふせ〜孫子あり之奥
奥之ねこあり めく孫の松のきをとうく
信吉の名をバおりハく種ぶし侍
ふたくひうきあため〜ともうれ
けるをのみく香〜強容ハ此ふまうあく



行事方部事佛大事の自重ふく雅く殘矣
もく〳〵今ハまゝしとい〻ども粹文ゆえ爰ふ記と

粹之大不以一義盡也粹爲言醉
也人生不可以有不醉又推也推

已及人之謂也又水也隨英器而
澹之謂也又師也元師大將之謂
也又吹也善作鼓吹者之謂也又
襄也一擲千金財宝相減之謂也
又陸也陸遠邊也總豈樓寂豪盛
者九州奥州之人其謂之乎大體
兼此衆義知之呂醉而不及亂此
謂之於吉醉嗚呼今世称粹者何
人乎哉

或人問〻云什布すいの字あり
炊ハ炊ぐ蓋〻云かしくと讀〻〻
ま濁を提るの意　又問雖碓並翠
誰の字おのゝいろん
雖ハ りむづおく猿ゑる寥れ
碓ハ 粉よひく〻〻利ぢ死をふる

西ハ 篇の字の字の作く容を
おむらのいひう
翠ハ ようひのこぐうかるをさとろうん
誰の一字ハむかくいろゆる雅よるもよ
とくるあるうひ法けよそのたきろうん
完望〻〻

右ハ隠易吾士の八字を以くるまよ
書おれ〻〻可憐〻〻人うるまを以てすハ
よめやもろ〻〻〻〻なめ傷刎と
行書方殿王羲之の蹇鶴銘を金箔の
石摺ふく文字の中又金張の石を敲あう
文八月出云文字を撰く毒うる むその中
寂寥の二字あうる二字をうぐと出食の
剛字よあうる高壹掘さび〻花と憂二字を
剛くるる 拔向の暇見ろう むを行ま方夢

物子を初め一方義字家書中絲術花字ホ
ろ ホいづきも詭家の揮容ヒイキ〻〻〻〻
ろうよろうの揮好ろ毛〻〻〻ろ傷容長命
方奠庭筑ホ山ふ犢の孤ろ石いつのやどか
とあ〻〻どあ〻〻〻ふと人のこるのあうぐ
むろよう孤ひ筆ろ〻〻〻ふく無胡
里の人〻義論を中古人けを抜ぬとろう
てあ〻きちり〻〻ふいつ〻ろ〻〻ろ傷をの
ろ〻〻ろぶ〻〻あ〻〻〻と云伝ふたり圖を

行吉屋老口帝方仁能因法師死の井の湯瓶
あ〻一直り六寸ろ〻〻丸敬〻ぬとホハ桐
う合鞍う内墨塗ろ死生と成ろる擬造の

容人ようおくるまでようみる
之ちかく死の後ようけこと死ば
まの白〳〵ろくろくよろれ老るみくろ
右八紙国法沙のふるうこと井のたくぐく
としの〳〵事をもち〳〵ぢる濡多ちろ
里詞の篇
廓中とべく者まとと嗅見白花ぐすなどのひ
ぬ〳〵賢うるるどくあぶむる云だるろ
なませんう　なんう上ノ畧言ナリ　ちよとこるる
どうでます　いつこるる　かあくさろ
きくん　すうん　どこじやあろ
見ぶまく家くの云義やくるらあくくハ
〳〵くハ通ひくゆるくべ〳〵
はりとろ　はるをいむ　りやちろひる　内と返り叫ろことば
あげく筆ようるく〳〵

價諸色七八九〇

太夫

六拾九匁

天神

三拾三匁

胡ろ等附を
むるを仕とくろ
拾匁

ろてと別と
むよい仕とろ
弐拾弐匁

ち敷ようろ胡と
むとろろろ
拾匁

ろしろ附一切
四匁三ろ

魏ヶ子	弐拾七文	
長とり付 一切	三文	
宰取持 揚屋	拾六文	
茶屋	拾四文	
廉子 位遊女分	弐拾七文弐分	
茶仕巴	拾弐文	
一歩揚	拾七文六分	
青仕巴	拾三文六分	
与角り	六文四分	
一切	三文六分	
同魏子	茶揚	弐拾弐文
後揚	拾三文六分	
一切	三文六分	

同庄女郎	弐拾弐文	
与角り	七文	
一切	三文	
太夫	銀三匁	
引祝	弐匁	
門出揚屋	天神	四匁
魏子	四匁	
同茶屋	天神	三匁
魏子	四匁	
同吹屋	遣女郎	四弐文
庄女郎	四匁	

○遊廓出門之数事

いろ〳〵廓のまあの大門上書所を
建て也ゑを紀ゐ出入事ゆゑ
今ハむう〳〵廓のたゝき女あるもふく
幾〳〵ごさくふる事のあるて通行もうき〳〵
まうう〳〵みのかう〳〵せどうつかまハて今
一間ゑまたく〳〵おりぐ〳〵門を守るもつ
梅つめりゝゑせんとくるく関の方を吹く法ハ
ゑ弱うゝきうゝゑかこう紀〳〵ゝ八まゝ
とあるんゝ風〳〵ゆうてい〳〵ゝゝ法
門出とう〳〵事もゞまゝ今ハ門も敷ゝ
絶し敷ゑゝ九ゝゝ如をいぐるひゝも
かやとく〳〵ゝゝ

△但揚屋茶屋ゝ家ゝ出ゝ付つけゝ
せバ出ゝ性面〳〵行為の法門出を記〳〵ゝ

○和金

但見せ拾ひい　拾弐匁　六分

右の通の歩限定ハ法新ゝ也
但見せ拾ひ一ゝ有切ホハ法新
別の定めゝ

朝飯料理代

揚屋　三匁
茶屋　弐匁五分

湯料雑用

揚屋　立ハ　呼ハ　三匁五分
茶屋　呼ハ　三匁五分

蠟燭代

揚屋　壱匁六分
茶屋　日ハ　呼ハ　八ト

右の分振義の節ハ法新雑用又ハ無こ
料理ハお射ゝ分指別のゝ
右定ゝの分雑用かゝ
中の定ゝ目也

○紋日定月

正月
三ヶ日　四日　五日　六日
七日　九日　十日　十四日
十五日　十六日　廿日　廿五日　廿八日

二月
朔日　初午　二午　十五日
廿二日　廿五日　廿八日
かこひ　ひげん七日がる

三月
朔日　三日　四日　五日
六日　七日　十六日　廿一日　廿五日　廿八日

四月
朔日　八日　十五日　十七日　廿日
廿一日　廿五日　廿八日

五月
朔日　五日　六日　七日　八日
九日　十五日　廿五日　廿八日　晦日

六月
朔日　七日　十一日　十二日　十四日
十五日　十六日　十七日　廿日　廿一日
廿二日　廿四日　廿五日　廿七日　廿八日
廿九日　晦日

七月
朔日　七日　十日
十四日　かこひ　晦日まで

八月
朔日　十四日　十五日　十六日
廿五日　廿八日　かこひ　七日がる

九月
朔日　九日　十日　十一日　十二日
十三日　十四日　十五日　十六日　廿日
廿一日　廿二日　廿四日　廿五日　廿六日
廿七日　廿八日　廿九日　晦日

十月
朔日　六日　十日　十二日　十三日
十四日　十五日　廿五日　廿八日　亥刻

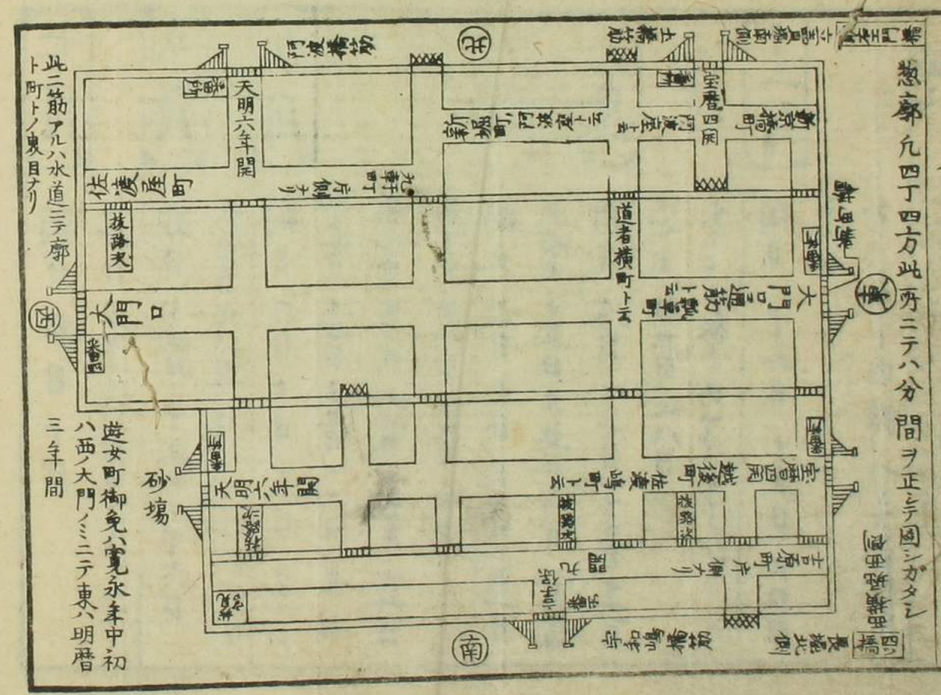
十一月
朔日　八日　十三日　十五日　十六日
十七日　廿五日　廿八日
かこひ　家々のすまし

十二月
朔日　十二日　十五日　廿五日
廿八日
かこひ　家々の解つき　節分

但し　庚申　年中　祝日也

惣廓方角畧圖

惣廓九四丁四方此所ニテハ分間ヲ正シテ圖シガタシ



揚屋之分

是ハ比比西國の所々ニ在所ニ
之ハ故ニ是ハ比比西國の所々ニ
在所ニ之ハ故ニ

茶屋之分

通り筋　筒井屋仁助　通り筋　本市屋伝兵衛
京屋　茶屋　折屋　弥兵衛
伊勢屋　八右衛門　伊勢屋　清兵衛
伊右屋　八右衛門　多賀屋　清兵衛
松葉屋　清兵衛　浅野屋　源兵衛
井筒屋　甚兵衛　惠屋　伊兵衛
大黒屋　里次郎　吉橋屋　与助
辰巳屋　熊次郎　河内屋　市左衛
博多屋　与三松　鶴屋　新兵衛
葉名屋　幸次郎　今井屋　忠次郎
中浦屋　惣次郎　大和屋　市次郎
弓浦屋　助次郎　上村屋　利兵衛
天王寺屋　政右衛　大坂屋　太郎兵衛
上林屋　治助　藤屋　長次郎

揚屋町 塚屋吉三郎
同 山田屋打三郎
同 住吉屋庄兵衛
同 打田屋吉三郎
揚屋町 吉野屋九一郎
同 八尾屋新兵衛
同 塚屋佐助
同 戎屋与三松

おはぐろ ささや屋茂兵衛 同 住吉屋九郎三郎

呼ひ屋之事
京屋九三郎 伏見屋長三郎
池田屋吉三郎 近江屋武三郎
右之外一百六七十軒有

商人名よせ之事
麩類名物 ときは八門ま六 和泉屋太三郎
同 同角 津国屋佐三郎
呉服物現銀店 ふじ井 鍋屋市郎治
志ま波 通筋西入 廣瀬屋忠三郎

三味線所 同 萬屋平三郎
伽羅香油 同 和泉屋清市
加茂川蝋燭 同 鼓屋吉三郎
楊枝所 西口九軒 楊枝屋平兵衛
むし風呂 揚屋町 清水屋治兵衛
卓机所 九軒之東 澤池菴
三徳酢名物 ?口 藤屋市次郎
ちまきぐし紅粉 同 亀屋与加三郎
志ま下駄 同 桜屋利三郎
とらや飯 西寺上之所 仲屋茂七

追而出来
山本 全部一冊 横本出来
[illegible]

諸國遊所 古今柳陌大全 近日出来 全一冊

山言ゑ唐土柳巷ゑ起ゑ朝鮮國兎詐乃遊里地名花街の名物古今花里上古より近世江戸迄綴録絵地名ゑ新新して和漢ゑ古書七十有に部を考古欲を参考し其所く出を中編ゑ事一ゑで委しく出を

場浦 新成 養曲江流の夢 いろはゝ模和一冊 三百八十番入

けゝ古八今世ゑて世ゑ出ゑて世ゑ出ゑ

ゑ世ゑ世ゑ世